

ごあいさつ

本展は、島寄清史にとって初の公立美術館における個展形式の企画展として、代表作を一堂に展示することで、その全貌に迫ります。

島寄清史は、1969年宮崎市佐土原町に生まれ、武蔵野美術大学・大学院で油彩画を学びました。卒業後は同大学助手を務めるなかで、当時教授であった宇佐美圭司に大きな影響を受け、その後宮崎県に帰郷し制作を続けてきました。2002年に1年間中国へ留学し、近年は山水画から着想を得た抽象的な風景画を手掛けています。

現在も、絵画教室を運営しながら制作に精力的に取り組み続け、また一方で、所属団体等の垣根を超えて集う機会（僕たちの広場展#1～5）を継続的に持つなど、その姿は同世代のアーティストにとって大きな刺激となっています。

コロナ禍を生きる私達にとって、本展が心の休息となり、明日への活力を与えてくれる機会となれば幸いです。絵画の根源から捉え直すことをテーマとして、表現を反転・転回してきた島寄ならではの情景を、どうぞお楽しみください。

おわりに、本展の開催にあたり、作品提供に快く御協力いただきました島寄清史様をはじめ、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

令和3年10月30日
高鍋町美術館

謝辞

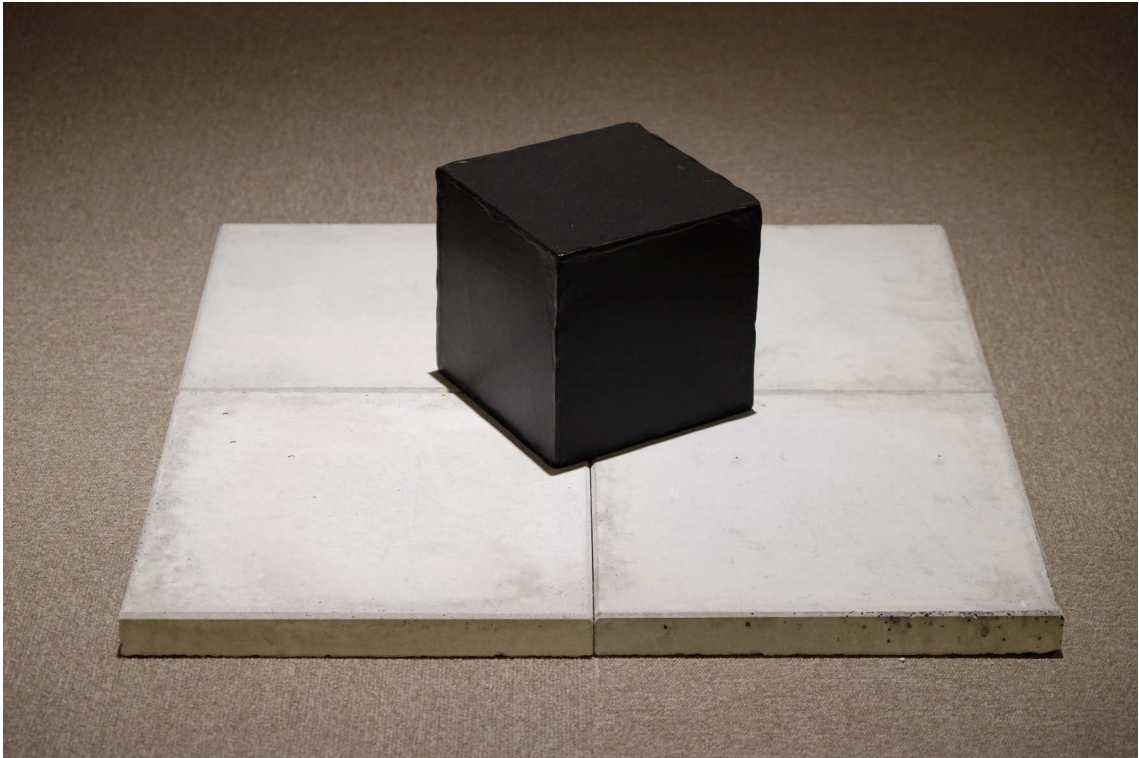
本展覧会を開催するにあたり、貴重な作品を貸与くださいました島寄清史様と、作品調査・文献調査等に際しご協力、ご助言いただきました皆様に深く感謝の意を表します。また、お名前は差し控えさせていただきましたが、本展覧会の実現のためにご尽力賜りました方々に、この場を借りて心からお礼申し上げます。

凡例

- ・本書は「島寄清史 風景の抽象画|抽象画の風景」（令和3年10月30日から11月28日 高鍋町美術館）の開催に際し出品された作品について収録している。
- ・作品データは、作品番号、作品名、制作年、素材、サイズ（縦×横×奥行 cm）の順に表記した。
- ・展示作品はすべて作家蔵である。
- ・作品名は本展覧会にあたって島寄清史氏本人が指定したものである。
- ・島寄氏本人による文章は、本人によるものをそのまま使用している。
- ・年譜は、島寄氏本人に確認しながら作成したものである。

目次

ごあいさつ	p.1
謝辞	p.2
凡例	
目次	p.3
図版	p.4
作品解説	
作品について 島寄清史	p.26
島寄清史の主題について 青井美保	p.30
年表	p.32
関連イベント概要	p.36
トークイベント口述	p.37
展示風景	p.50
作品リスト	p.54
展覧会概要	p.56
写真提供	p.57



1 ゴロタロ/画面体 2018～ 現在(未完) アクリル 17×17×17 cm

1日1面のペースで6面を代わる代わる黒い絵の具で塗り重ねました。現在も進行中。
[島寄]

2011年～2015年、島寄は団体を越えたグループ展「僕たちの広場展」のリーダー的存在となる。このころから、島寄は腹をくくったように、「絵画」という対象を、あらゆる手法で描くことに挑戦する。「ゴロタロ/画面体」は、支持体さえないほどに、もはや塗るという行為だけに制限されたなかで生まれた作品である。手に乗るほどのサイズのときは、軟体のように不安定な輪郭の塊であったそれは、時間と重さを携えて、凜とした存在へと変化してきている。



2 イエローナイフ 2013年 キャンバス・油彩 194×130cm

ペインティングナイフで黄色い絵の具を塗りこめました。[島寄]

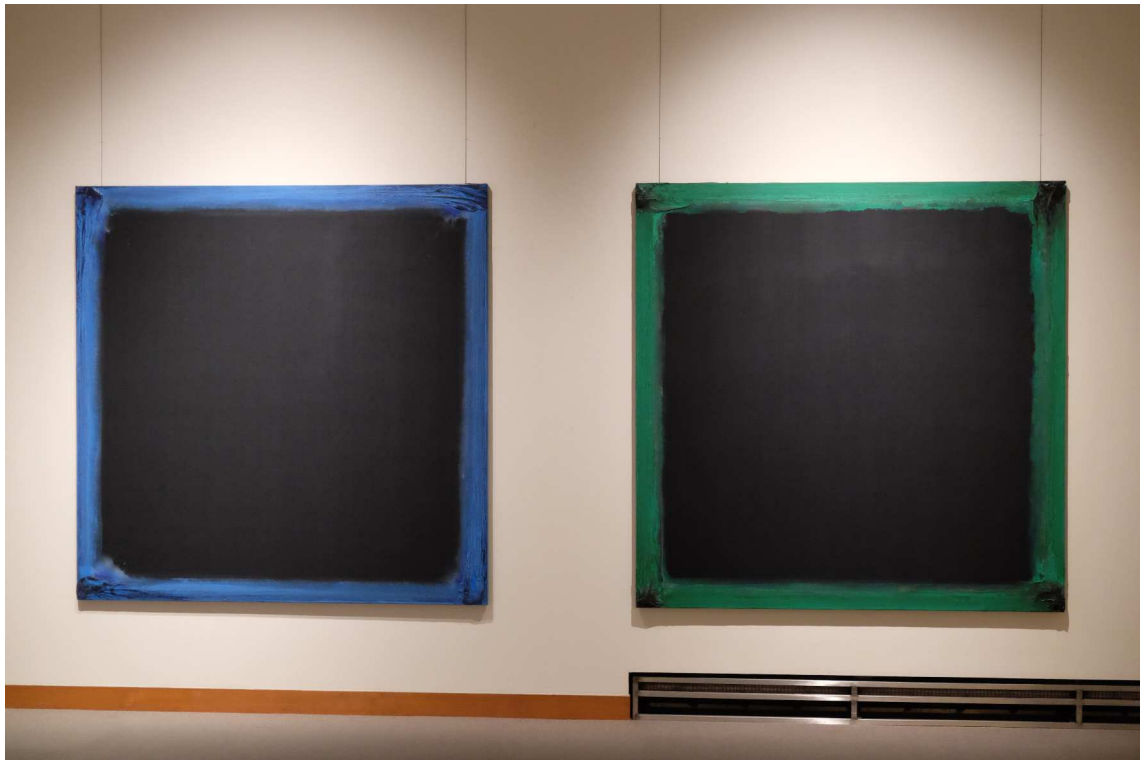
一連の「絵画の肖像シリーズ」の初期作品である。絵画自体の肖像を描くと決めた島寄の画面から具象的なものが消え、キャンバスの上にあるのは、黄色い画面とペインティングナイフと思しきグレーの鋭角なフォルムだけである。何層にも塗り重ねられた黄色一面は、島寄の対峙した時間の経過を感じさせる味わい深さがあり、さらにそこに突如として画面に入りこむペインティングナイフの存在感が画面に動きをもたらせている。



3 青の肖像 2013年 キャンバス・アクリル 162×390cm

キャンバスの裏側にある木枠をうっすら表に書きました。キャンバスそのものがモチーフの作品です。[島寄]

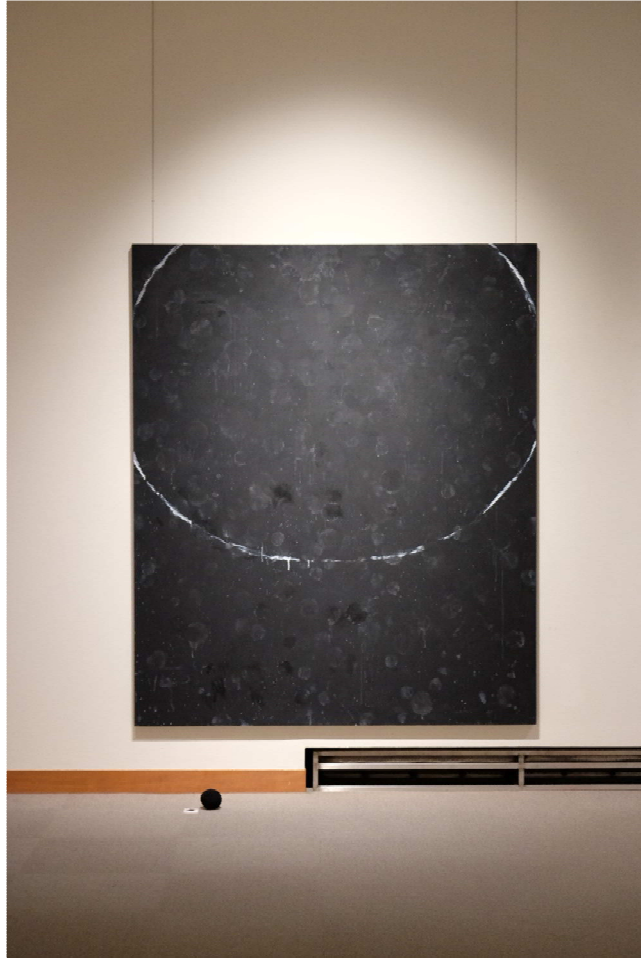
よく見ると、青い画面にうっすらと縦に横にと線が浮き上がっている。その線はキャンバスの支えとなる木枠の線である。本来、キャンバスの裏側を見るときにしか認識しないはずの木枠が、キャンバスの表面にも主役となって描写されている。画家が基礎を学ぶとき、林檎やガラスのコップをその裏側まで意識して描くように、島寄にとってもその経験は描くうえで重要なヒントとなった。鑑賞者は常日頃キャンバスの表面を絵として認識し鑑賞するものだが、この作品の前では、キャンバスの裏面までもを意識して鑑賞するという新たな見え方を提供している。島寄のこのアプローチは、この後も継続される。



4 around 2014年 キャンバス・アクリル 162×162cm×2点

キャンバスの木枠を触りながら描いた作品です。[島寄]

薄いマチエールに、にじみの効いた黒い画面が目を引く。キャンバスの四隅には絵の具の塊を載せ、両手でゆっくりと絵の具を反対側の端へと引っ張っていく。その行為はさながら「かな削り職人」のようであったと、島寄は語る。もうなにも“ものを描かない”と自身を制限する島寄の、絶望に近い深い暗闇が画面に広がる。しかしまだそこにキャンバスは確かにあると、島寄が素手でキャンバスの淵を触り、触った部分だけが異様に盛り上がる。「現代の自分だから描けるものはなにか」と問い続ける島寄の、絶望と希望の入り混じる作品である。



5 mark 2015年 木材・キャンバス・アクリル・スポンジ 194×162cm

スポンジに絵の具をしみこませ、それをキャンバスに向かって投げながら描きました。白い輪は私が手を広げた軌跡である。玉が輪を通過した痕跡を残しました。[島寄]

黒い画面に、ボールが投げつけられた無数の跡が白く残っている。島寄自身の行為を、鑑賞者が追体験できるような構造である。鑑賞者が、無数の跡は手前に置かれたボール（スポンジ）によってできたものであると気がつく、どの程度離れたところからそのボールを投げただろうか、と想像することになる。あるいは、島寄によるテキストを読むことで、手に白い絵の具を付け、島寄がキャンバスの前に佇み両手を上げ下げする様子を想像する。作品の見え方は一層自在に変化する。鑑賞者との対話を重視するような島寄作品の特徴は、この後に発表される geo シリーズでも見てとれる。



6 アウトライン 2014年 木材・綿布・アクリル 300×9×100cm

支持体を角材に代えて、壁に立て掛けて設置しました。[島寄]

この作品について島寄は、キャンバスの矩形についての作品であると語っている。本作ではキャンバスの輪郭だけをイメージのなかに抽出し、再構成している。その棒状の立体が地面に接するとき、立体と地面が隙間なく密着するように作られていることに注目したい。前作「mark」(p.8)のテキストで島寄が「玉が輪を通過した」と表現していることや、あるいは、「青の肖像」(p.6)でキャンバスの表と裏を、一つの画面のなかに落とし込んでいることを踏まえると、このアウトラインもまた、島寄のイメージのなかでは、地面を貫通しているのではないかとさえ想像させる。



7 geo 2018年 キャンバス・アクリル 130×97cm

はじめに、点と線で風景面を描くことを決めました。次にその風景は身の回りの風景、宮崎平野になってきました。[島寄]

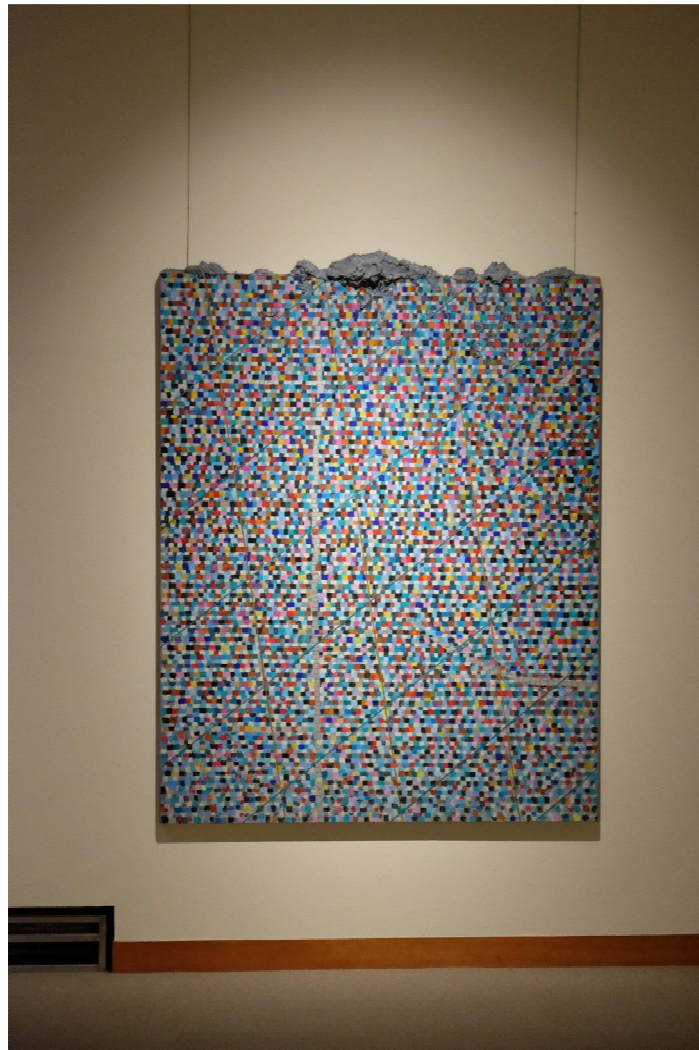
2014年、絵画の肖像シリーズの幕が下りた後も、島寄は、描くという行為を全面的に解放することを自身に許さなかった。次に自身に提示した条件は、点と線だけで絵を描くということだった。印象派による点描画や、パウル・クレーの点描による風景画、2002年の中国留学を機に、一層深い関心を持った雪舟の「秋冬山水図」の視点をも盛り込み、それら複数の要素が、風景の抽象画を形づくった。キャンバスの上には、宮崎平野の稜線が鎮座している。平面と立体の境界線を意識的に越えてきたここまでの経過が、ひとつのキャンバスに結実した瞬間である。



8 geo 2019年 キャンバス・油彩・セメント 227×162cm

キャンバス上部の山を明確にしました。[島寄]

島寄は「秋冬山水図」(雪舟)による一つの画面に盛り込まれる近景や遠景に、絵画の可能性を見出した。上空からの視点を持ち宮崎平野を鳥瞰したように眺め、あるいは足元の地下に広がる地層の奥行を眺める。描写方法を点と線だけに制限して描いたからこそ、同時にいくつもの要素を画中に含ませることに成功している。右下には不吉な黒いナイフが登場している。イエローナイフで登場したペインティングナイフが、より鋭利で恐ろしいものの象徴として、geoシリーズの画面を突き刺している。

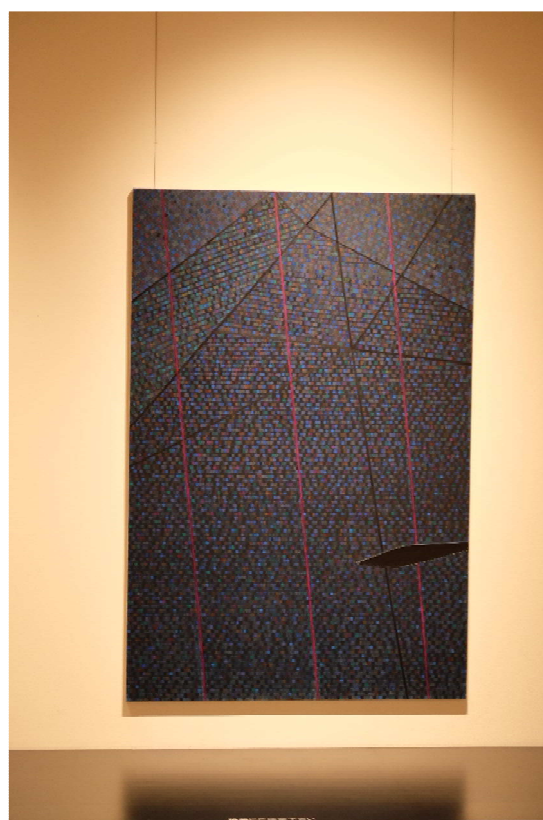
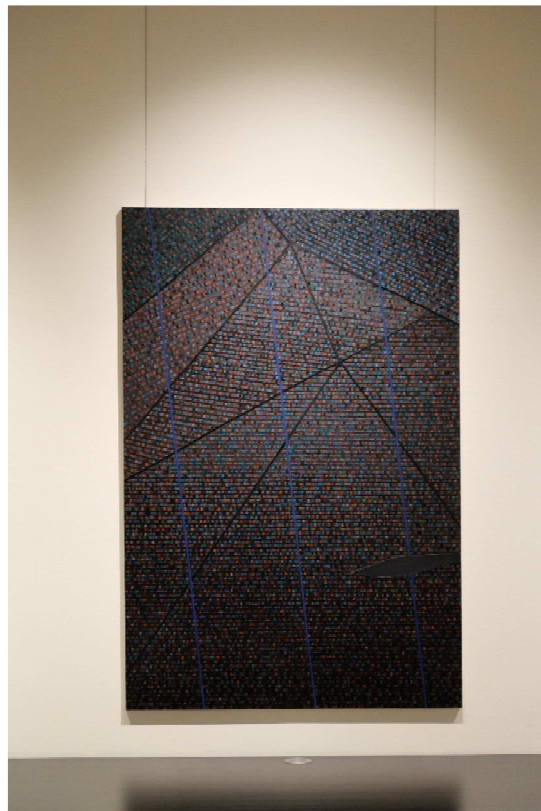
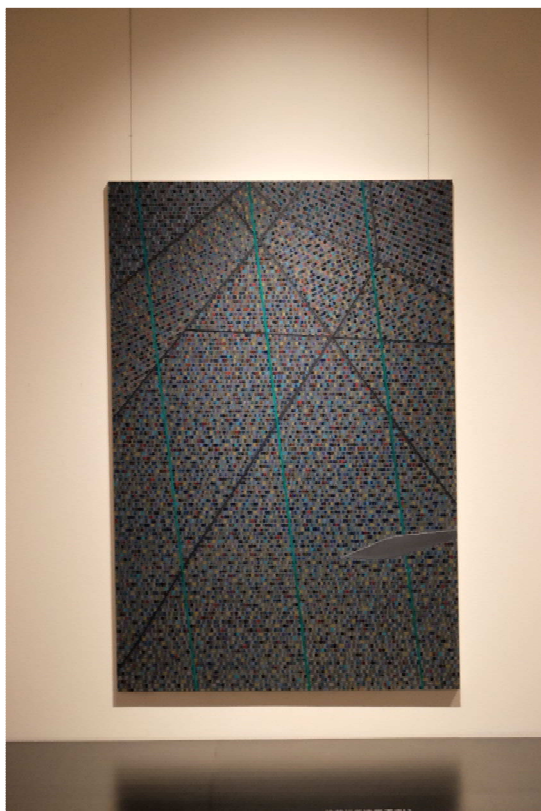


9 geo 2018年 キャンバス・アクリル・セメント 162×130cm

キャンバス上側部に山があり、画面が山下に広がる平野や地中の様相を呈しています。

[島寄]

このころから、過去作品ではあまり見られなかった色の組み合わせに意欲的に取り組む様子が見てとれる。描くという行為を再構築した島寄作品には、おおよそ作家の主観が不在となった。それは島寄が意図してのことだったが、どれだけ取り除いても島寄の本質が炙り出るのも事実だった。主観で表現を選ぶことを許さなかったことで、かえって島寄の表現は独創的になり多様化している。画面中を巡る不穏なグレーの線が画面を切り裂き、分割させている。

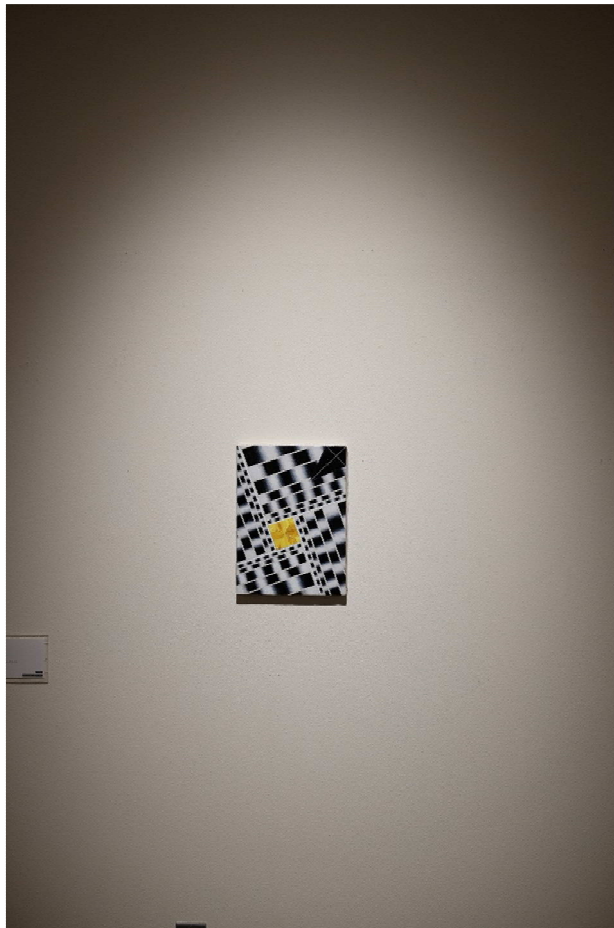




10 g e o/黎明 2020年 キャンバス・油彩・アクリル 194×130cm
×3点

紙を谷折りした軌跡で山の残像を画中に取り込みました。画面右下のナイフの形は、いつ襲ってくるともわからない災害の予感をイエローナイフに倣って表しています。[島寄]

ぐっと色のトーンは抑えられ、絵の具はキャンバスにねっとりと貼りついている。キャンバスの上側部の載っていた立体による稜線は、キャンバスのなかに吸収されている。この時期島寄はアトリエで何も描かれていない白い紙を、山型に折る行為を繰り返し、本作にはそれが平面の可能性に挑戦する形で落とし込まれた。黎明というサブタイトルは、作品「れいめい」（瑛九/1957年/東京国立近代美術館蔵）からきている。作品に点を用いるとき、瑛九のことを思う。美術史上に名を馳せた画家たちを、島寄が敬う思いが、作品タイトルに捧げられている。

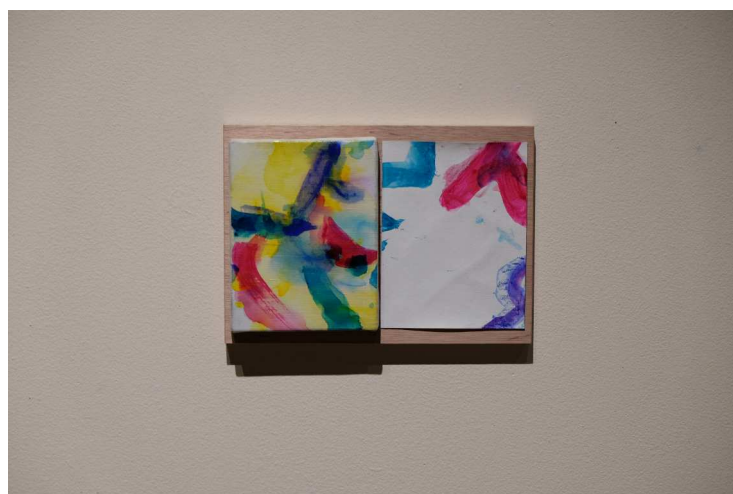
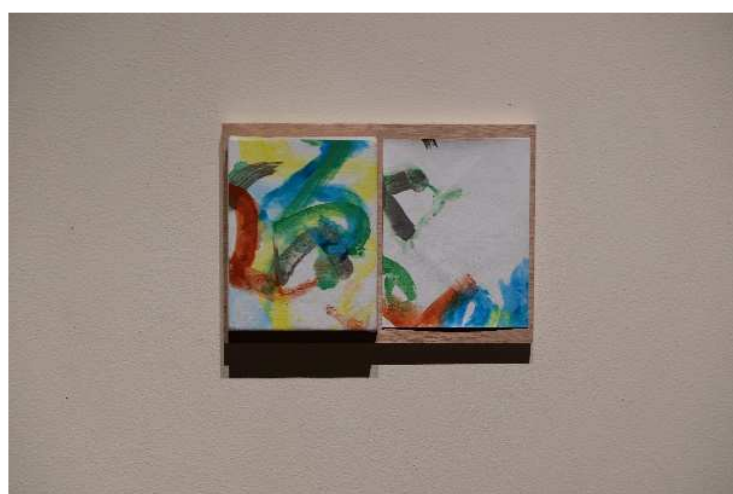
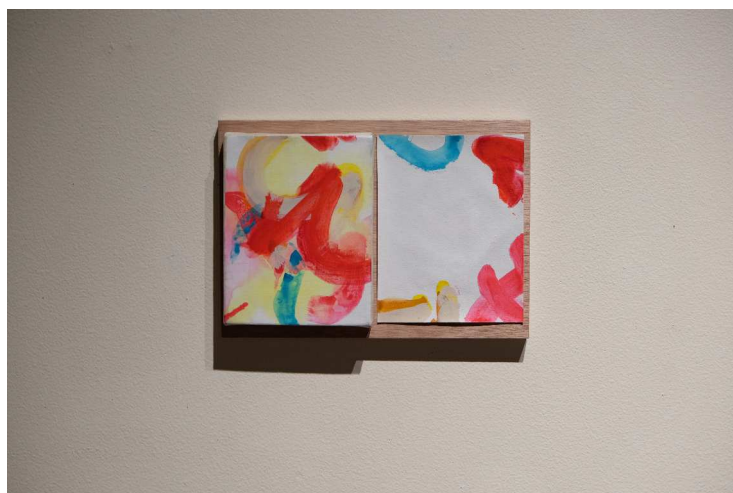


1 1 反転地 2021年 キャンバス・油彩・アクリル 33×24cm

風景が特定の場所から様々な局面を表す場が変わってきました。色彩や動き、光と闇が入れ替わり現れる場として。[島寄]

画面のなかに視点が複数存在している。本作の中央にある黄色の面について、島寄は“世界の外側”と回答している。「g e o」で堆積する時間を意識させ、この「反転地」では時空の動きそのものに焦点が当たる。回廊に展示した連作では、本作と同様に画面を分割する線を携え、さらに分割した面ごとに異なる時間と空間を描く手法へと展開している。

「g e o」と「反転地」に描かれているものの共通点は、私たちの生活に確かにあるけれども、決して目には見えないものである。





- 12 四方山話/もぞらし 2021年 キャンバス・アクリル 18×14cm×2点
13 四方山話/さるく 2021年 キャンバス・アクリル 18×14cm×2点
14 四方山話/よんべ 2021年 キャンバス・アクリル 18×14cm×2点

画面の四隅（やすみ）を折り畳みながら描きました。言葉をモチーフによしなしごとを描いています。[島寄]

島寄が幼少期を過ごした亡き祖母との時間や思い出を、作品として体現している。白い紙を重ね、画面の四隅を折り曲げ割り印のようにして、絵を描いている。反転地と同時期にスタートした本作は、白い紙を折る行為と、話し言葉というキーワードを組み合わせたものである。話し言葉は、その瞬間にしかそこに滞在しない。話し終えた瞬間に、言葉は消えて無くなる。一瞬の、人と人との交わりやその交わりの儚さまでもが、作品に内包されている。



15 反転地/反時計回り 2021年 キャンバス・油彩・アクリル
145×112cm

風景が動く仕組みを絵にしました。[島寄]

中央部分を取り囲むように六つの面が分割されている。六つの面は色相環からヒントを得た配色である。サブタイトルの反時計回りは、地球の自転を指す。青空だった空は、夕焼け色に染まり、燃えるような赤となる。日が暮れて、しんとした土の茶色に変わる。まぶしいほどの光が差し、緑が生き生きと輝く。そのような一日の、そして46億年前からの風景のうつろいが、ひとつの画面に収められている。四隅には白い紙の折り線で成る四角形が白黒の濃淡で描かれ、立体的な象徴として存在感を放っている。



16 フランケンシュタイン 2013年 パネル・綿布・アクリル
200×150cm

キャンバスを壁に突き立てるように設置しました。出来上がった時、得体のしれないものを作ってしまったようで、フランケンシュタインと名付けました。[島寄]

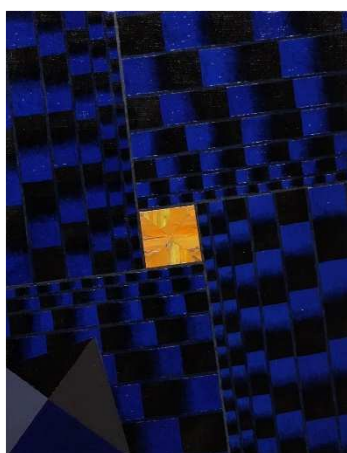
黒いキャンバスが、まるで空中に浮かんでいるようである。「アウトライン」(p.9) と同時期に制作された本作は、キャンバス（絵画）を全方位から鑑賞できるつくりとなっている。なめらかで黒い絵肌がキャンバスの全面を覆い尽くしている。作品から受け取れる情報の少なさと、“絵画は壁に掛かっているもの”といった私たちの固定観念に相反する佇まいに、恐ろしささえ感じる。絵画は人の手で作られるものであるが、もしも人の手を離れ、絵画自体が意思を持ったとしたら、このような形なのかもしれない。



17



18 19



20



21



22

作品情報は p.54-55 に記載



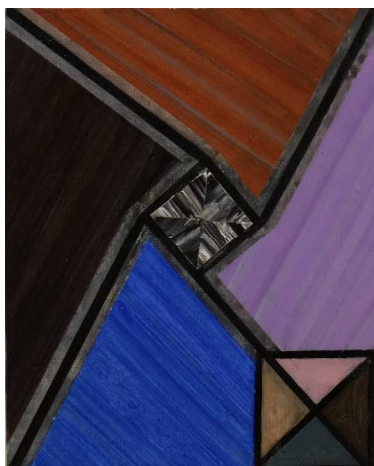
2 3



2 4



2 5



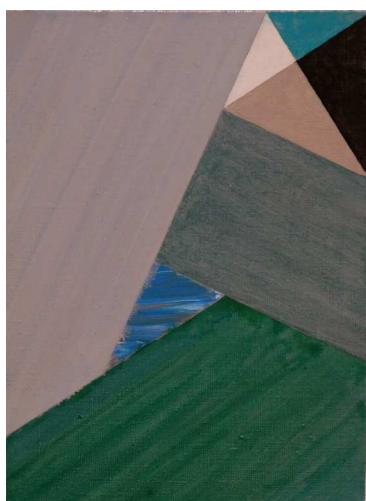
2 6



2 7



2 8



2 9



3 0



3 1

作品情報は p.54-55 に記載



3 2



3 3



3 4



3 5



3 6



3 7



3 8



3 9

作品情報は p.54-55 に記載



4 0



4 1



4 2



4 3



4 4



4 5



4 6



4 7

作品情報は p.54-55 に記載



4 8



4 9



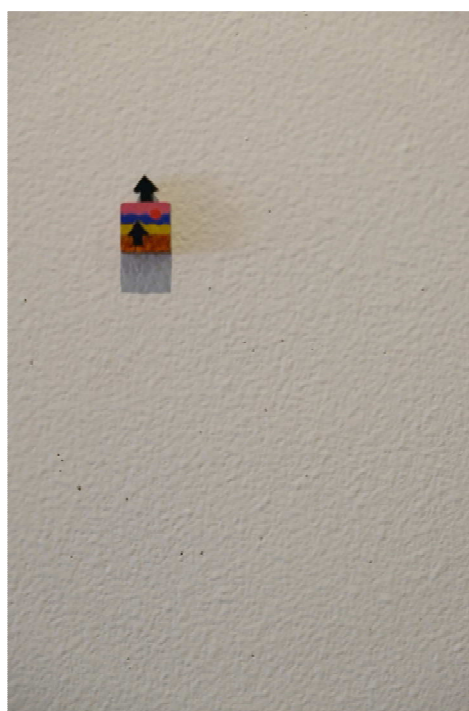
5 0



5 1



5 2



5 3

作品情報は p.54-55 に記載



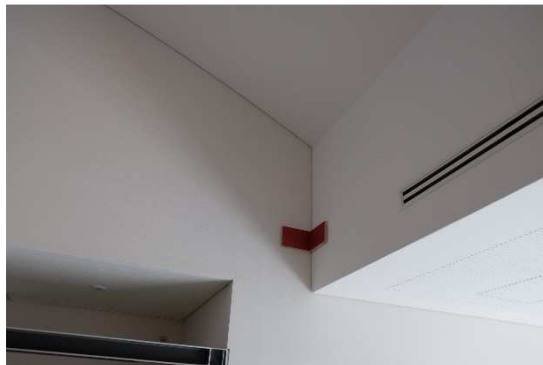
5 4



5 5



5 6



5 7



5 8

作品情報は p.54-55 に記載

作品について 島寄清史

「風景の抽象画 | 抽象画の風景」について

まず絵画を大きく2つに分類すると、人物画と風景画に分けられると思った。そして、人物画、これは形を描くことと言い換えてもよい。絵の中に形を描くということではなく、キャンバスそのものを形として捉えて描く為に、塗るという作業が中心になってきた。

「ゴロタロ／画面体」

3年7ヶ月ほど、ほぼ毎日1面ずつ面を塗り重ねたもの。転がしながら塗るので、ゴロタロ中心の最初につくった小さな絵の具の塊が宙に浮いて存在している。ただ、ひたすら四角い画面を塗り続けて立体の形をしているが、絵画の意識で描いていることから画面体とした。ゴロタロは名前のようなもの。作り始めがゴロタ石のようだったのでゴロタロと付けた。カタカナのロが繰り返すところも制作の仕方と近い。今では重さ7.5kgになり、だんだんと自重で自らの形を決定するようになってきた。作品自らが作品に描かれることを半ば決定する四方山話にも、この考えが活かされている。最終的には地球と同じ大きさにして宇宙に浮かべたい。

「イエローナイフ」

文字通り、黄色い絵の具とそれを塗り込めたパレットナイフが描かれているだけの絵になっている。このナイフの形は後の geo シリーズの作品にも再び登場してくる。そこでは、東北の震災での自然の猛威のメタファーが込められている。地表を覆い尽くす黒い波。ナイフのイメージの原型は鬚光の眼のある風景の中にある形である。

「青の肖像」

キャンバスの裏の木枠を表に描き表すように描いた。キャンバスを体にたとえれば、レントゲン写真のようなもの。青い色は透視するイメージから、透明の空のようなイメージがあった。身体が空に溶けてゆくような。

「around」

実際にキャンバスの木枠を触ること、その痕跡を絵の具に残すことをした。まず、絵を寝かし、キャンバスの四隅に絵の具を盛り、手で木枠の感触を確かめながら一気に引っぱるように（大工さんが木材にかんなをかけるような具合に）描いた。絵画の肖像シリーズは黒い絵がほとんどだが、黒はすべての色を混ぜ合わせた、つまり、すべてのイメージを重ね合わせた象徴的な色として扱っている。

「mark」

丸いスポンジに絵の具を染み込ませ、画面に向かって思いきり投げつけてみたり、時にはそっとアンダーハンドでやさしく投げたりしながら描いた。筆のかわりにスポンジを使ったということ。筆は画面に接していないと描けないが、飛び道具としてのスポンジは、画面からの距離をさまざまに変えることができる。画面までの距離感を持った無数の球の軌跡が凝縮する形でフラットな一面にあらわれることが面白かった。その痕跡は夜空の星のように宙に浮かんでいた。白く浮かんだ星を画面の奥に通過させるために黒く塗りつぶした。白い楕円は距離 0 地点の基準として両手を広げた手の軌跡。絵画の肖像シリーズの中でも身体性がでてきた作品になった。

「アウトライン」

木枠の支持体を角材に置き換えた作品。壁に立てかけ、床に接する部分をカットして、地中に向けられた線のようにしたかった。キャンバスの矩型のアウトラインを細長い線で構成されたものに作り変えた。

「geo シリーズ」

はじめに述べた絵画を大別した時の風景画にあたる。はじめに、点、線、面の要素で塗る行為から描く行為を復活させ抽象的な風景画を描く目論見だった。モンドリアンが具体的な木の姿から抽象画を進めていったことを遡って抽象要素をもって具体的な風景を描こうと思い立った。これは私なりの反転行為だが、反転という言葉は宇佐美圭司先生から出された問題のようなものだった。モンドリアン、さらには、デュシャン、ミニマルアートなどを知れば、この先、彼らに追従して作品を作ることは美術を窒息させてしまうように思えた。そこをターニングポイントとして折り返す、または反転する必要があることを宇佐美先生の著書「20 世紀美術」は言っている。反転という言葉は荒川修作とマドリン・ギンズの代表作岐阜県にある「養老天命反転地」が有名だが、実際、学生時代に大学に荒川氏が来て講義を聴いたショックも大きいものだった。講義の冒頭、荒川氏は「君たち、絵なんか描いてはダメだ。」と静かに言ったが、私はいまだに絵で何とか世界の在り方を理解しようとしている。これは賭けるしかない。

geo シリーズを描くにあたって、画面構成に大いに参考になったが、雪舟の「秋冬山水図」だった。三遠、「見上げる、見下ろす、見渡す」視線の方向の違いによって、画面を近景、中景、遠景と積み上げるように再構成する水墨画の画面構成法を geo に引用している。画面に見渡す平原と見下ろす地下を重ね合わせ、見上げる山を画面上部の縁に絵の具を盛り、見

立ての山とした。これが描いてみると、アトリエの周りの田畑が広がる風景、さらには、宮崎平野を連想させる平原の具体的な風景に図らずも重なって見えた。

また、「秋冬山水図」からは、geo シリーズの後の反転地シリーズの画面分割の仕方にヒントを得た。加えて、日曜美術館での李禹煥さんの雪舟の絵画についての斬新な分析と解説、また李さん御自身の作品からも制作の力をいただいた。

geo シリーズ「黎明」では画面上部の山を画中に取り込む為に画面を三角折りに折り畳み、そこにできた折り目を残すことで山の残像を画中にとどめることができた。これは反転地、四方山話の画面四隅を折り返し、山をつくる方法の原型である。また「黎明」は瑛九の「れいめい」への私なりの応答でもある。しかし、瑛九のアトモスフィアな点描に比べ、私の点はシールみたいに画面に貼り付くものになっている。空間より時間の反復に関心があったせいだろう。

「反転地シリーズ」

画面の角を折った所から斜線を導き出し、その線が面を区切り、分割された面はそれぞれ違った時間や場を持ちつつ動いているといった風景の局面を描いている。画面中央の面は、その局面の世界とはまた別の場所つまり世界の外側にあるであろう場所を想定している。

「反転地／反時計回り」では風景の動く仕組みが描けたのではないかとと思っている。反時計回りとは地球の自転する向きのこと。

「四方山話」

画面の四隅（四方の山）を折り曲げたところに割り印をするように彩色すると、表面と裏面に同時に描画されることを発見し、これを2枚合わせで行うことで、見えない裏面も横並びに見えるようにすることができた。はじめは山と平野の彩りを描いていたが、見えない裏面が世界の外を描いているとの認識が強くなってきた時に、祖母の言葉をモチーフに描きなくなった。祖母の言葉は私の原風景であり、私と祖母をつないでいるものでもある。それがこの四方山話の描法に合致していると思った。言葉で物語を語ろうとしているのではなく、美術的な捉え方で言葉を咀嚼するという具合だろうか。

また、コロナの時期にあって芸術分野の中でも特に文学がしっかりと表現の場を持続していた印象が強く、言葉とは何だろうと改めて考える機会になった。そのようなことも、祖母の言葉、あげくの果てには兼好法師の徒然草にまで目が向いてしまった原因だと思われる。

絵を描けば描くほど見えないものが気になり、それを画中に含めなければ、世界の全体像を表していないような気がしてくるので、絵を描くということは何とも奇妙で滑稽なことだ

作品について 島寄清史

と今更ながら思うが、転がっている石ころの裏側が見えないように、私たちの生の反対側が見えないことも事実だと思うのです。

「フランケンシュタイン」

通常見えない絵の裏面を表す為に、壁に突き立てるように設置した。作品、絵画の身体、ボディを明らかにしたい思いがあった。しかし、実際作って見るとこれは果たして絵画と呼べるものだろうかというものになってしまった。何か得体の知れないものを作ってしまったようで、フランケンシュタインと名付けた。

島寄清史の主題について 青井美保

筆者が初めて島寄作品を鑑賞したのは、15年以上も前のことである。日本昔話をテーマにした作品が多く、その後、タコやカタツムリといった軟体生物がモチーフとなった。その変遷の様子は、モチーフが画面に溶け込んで消えていくようであった。



2013年ごろから、いよいよ本格的に抽象画に取り組みはじめる。作品表現から受け取れるように、島寄はアメリカ美術に精通しており、武蔵野美術大学時代には同じく助手を務めていた橋本達也と交流をもち、教授の藤枝晃雄から講義を受けている。

藤枝が編訳を手掛けた『グリーンバーグ批評選集』¹で、「棚」(1995年)批評家クレメント・グリーンバーグは絵画におけるモダニズムを、平面性という絵画に固有の性質(メディウム・スペシフィティ)の探求として位置付けている。島寄の作品をみると、まさにその視点で制作に取り組んでいることは明らかである。

ここで島寄の作風に大きな影響を与えている作家を二人挙げたい。一人は、本展フライヤーにも名を挙げた宇佐美圭司である。島寄は武蔵野美術大学の助手時代に、宇佐美と交流を深めており、以降の画業において、その体験や思想を反芻する形で制作に向き合っている。島寄は宇佐美との出会いで、「よい絵を描く」概念から解放され、自己完結をせずに未分化なものを作家の傍に置きながら制作に取り組むスタイルへと移行した。

もう一人は、当時武蔵野美術大学で教授を務めていた彫刻家の戸谷成雄である。島寄は、大学の卒業アルバムで戸谷が学生たちに送った言葉を口にする。「あるひとつの事実をつかんで、遠くのものや近くのを摺りあわせしなさい。」この観点は、その後島寄が助手時代に発表した作品「鬼を待つ」(1999年)にも反映され、戸谷はそれを評価していた様子である。² また、本展でひととき存在感を放った geo シリーズの、近景と遠景の共存という概念の出発点であったに違いない。



島寄に画家としての在り方に大きな影響を与えた宇佐美圭司は1969年から1972年まで渡米しており、

その経験をもとにアメリカ美術の閉塞感と絵を還元していくことについて語っている。³ そのような背景から、アメリカ美術への憧れと閉塞感の両方を感じとっていた島寄が、いよいよ抽象画に取り組むということはどういうことであっただろうか。

「鬼を待つ」(1999年)

ところで、島寄の「反転」という概念は、武蔵野美術大学の卒業制作時点で存在する。

¹ C.グリーンバーグ(2005) グリーンバーグ批評選集 劉草書房

² トークイベント「島寄清史×妻木良三」本紙 p.38

³ 宇佐美圭司(1994) 20世紀美術 岩波書店

島寄清史の主題について 青井美保

島寄はその年の最優秀賞を受賞し、宇佐美から「絵の奥が強調され、手前と奥が反転させようとしているところがよい」と講評を受けている。

また、本展のトークイベントで登壇した妻木良三が「おかしい量の缶コーヒーの空き缶が積み重なって」⁴と語った時期は、過去の島寄の発言と照らし合わせると、

大学院2年の1月である（「棚」1995年）。自宅アパートに閉じこもり、学校にも行かず、悩みぬいて卒業制作に取り組んだ作品があった。自分の力を尽くして、駄目だと思ってもやって、自分を越えるプロセスを経て完成するという体験を島寄はここで得ている。

島寄は2002年に県美術展留学賞を受賞した際に、留学先として中国を選んだ。ちょうど時代は日本から中国への画廊進出が本格化し、九州には福岡アジア美術館が開館（1999年）するなど、アジア美術の勢いを感じる時期であった。当時から島寄は、ヨーロッパが油絵の本場であるのに対して、油絵が外から入ってきた国に生きる者としてなにを描くかに関心があった。

2013年に、筆者は長期的に島寄のアトリエに伺いインタビューをおこなう機会を持った。⁵ 当時島寄はカラーピースシリーズに取り組んでおり、

「色の持つボリュームを思いながら描いている～中略～絵画から彫刻をみる、そういう行為をやりたい。」と語っていた。本展で展示した「フランケンシュタイン（2013）」は、まさにそうした挑戦のなかで生まれた作品である。島寄のアトリエには「人間ではない」と書いた紙が掲げてあった。人間としてもものを見ることから一度距離を置き、昆虫や植物、自然の現象から見た視点や感覚を自分のものにしてみたいという欲求がある、と島寄は語った。



「カラーピース」2013年

この欲求がやがて geo シリーズに繋がったのだと、今になって分かる。

本稿の冒頭で、筆者がさも2013年から急激に核心部分へと向かっているように記している島寄の作風は、こうして改めて辿ると、大学・大学院・助手時代に得たものをふつふつと沸き立たせ続けていたことがうかがえる。そして、フランケンシュタインから肖像画までの一連のメディアウム・スペシフィティにおける還元のなかに自らを置くことによっ

て、geo、反転地、四方山話と、自身の核心に迫った新たな見地へと、作風を展開させた。

コロナ禍で1年延期しての開催となった本展が、島寄の画業におけるそうした重要な時期に開催できたことは幸運であったとしか言いようがない。長年、現代における美術の行き詰まりに直面しながら、宮崎に住む自分にしか描けない絵というものを模索しつづけている島寄の姿がある。作品は、画家個人の単なる表現行為ではない。画家一人の身体を通して見える、世界の美術史であり、宮崎の現代であり、未来への絵画の可能性であるということを、島寄作品は示唆している。

⁴ トークイベント「島寄清史×妻木良三」本紙 p.38

⁵ 青井美保（2013）インタビュー島寄清史 大友出版印刷

島寄清史 年表

- 1969 ● 宮崎県宮崎郡佐土原町生まれ 父洋次郎・母京子の次男として生まれる
- 1976 ● 佐土原幼稚園卒業
- 1982 ● 佐土原町立那珂小学校卒業
- 1985 ● 佐土原町立佐土原中学校卒業
- 1988 ● 宮崎県立宮崎北高等学校卒業
- 1989 ● すいどーばた美術学院在籍（～1990）
- 1992 ● すいどーばた美術学院油画科講師を務める（～1996）
- 1994 ● 武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業（卒業制作／優秀賞・三雲祥之助賞）
- 1995 ● 「島寄清史個展」（フタハ画廊／東京）
「島寄清史個展」（銀座スルガ台画廊／東京）
- 1996 ● 武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了（修了制作／優秀賞）
武蔵野美術大学造形学部油絵学科研究室助手を務める（～2000）
- 1997 ● 「武蔵野美術大学助手展」（武蔵野美術大学美術資料図書館／東京・～2000）
「二人展」（あかね画廊／東京・～1998）
- 1998 ● 渡欧（フランス・イタリア・スペイン／約1ヶ月間）
- 1999 ● 「島寄清史個展」（銀座スルガ台画廊／東京）
「美の予感展」（日本橋高島屋／東京・横浜高島屋／神奈川・大阪高島屋・京都高島屋）
- 2000 ● 4月に宮崎に帰郷
「島寄清史個展」（宮崎県立美術館県民ギャラリー）
「島寄清史個展」（あかね画廊／東京）
「デザインアートプログラム公開講座 宇佐美圭司 × 橋本達也 × 島寄清史」（東京ウイメンズプラザホール）



幼少期



1982年（中学1年生）スケッチ大会にて



大学卒業制作（題）1992年



大学院 修了制作の様子

2001	● 「第27回宮崎県美術展」大賞 ● 「第53回宮日総合美術展」奨励賞 ● 宮崎第一高等学校美術講師を務める ● 「現代日本画・洋画新鋭作家展」(日本橋高島屋／東京) ● 「武蔵野美術大学校友会宮崎支部展」(宮崎県内各所・～現在)	 第27回 宮崎県美術展 大賞作品「砂場」, 2001年
2002	● 第6回宮崎県美術海外留学賞を受賞し中央民族大学／北京へ留学 ● 「第11回英展～自然・風景～」(田川市美術館／福岡)	
2003	● 佐土原町の自宅にて絵画教室を始める ● くすの木カルチャーセンター講師を務める ● 「第55回宮日総合美術展」(奨励賞) ● 「宮崎県美術海外留学賞帰国報告展」(宮日会館／宮崎)	 北京へ留学中の様子
2004	● 佐土原ますや 絵付けを務める(～2007) ● 「島崎清史個展」(ギャナリー野の苑／宮崎) ● 「金魚展」(ギャナリー鬼築／宮崎) ● 「武蔵野美術大学校友会鹿児島支部も展」(～2008)	
2005	● 5月 佐土原町にアトリエを建てポンちゃん絵画教室を始める	
2006	● 個展「たぬきのお宿展」(ホワイトギャナリー／鹿児島) ● 「シルクロードの風景・佐土原の人々展」(ポンちゃん絵画教室／宮崎) ● 宮崎県高校美術実技講習会講師を務める(～現在)	 帰国報告展
2007	● 「第16回英展～抽象・幻想～」(田川市美術館／福岡)	
2008	● 宮日カルチャー MRT ミニク教室講師を務める(～2016) ● 宮崎県美術展運営委員を務める(～2016)	
2009	● 「九州コンテンポラリーアート2009」(福岡県立美術館) ● 個展「タコ時々カタツムリ展」(宮日会館／宮崎)	

2010	● 個展「ことみちゃん展」(宮崎銀行西佐土原出張所／宮崎)	
2011	● 震災支援絵画彫刻展(ギャラリー野の苑／宮崎) 放送大学特別開放講座講師を務める	
2012	● 「僕たちの広場展#1」(みやまきアートセンター／宮崎) 「第20回記念 英展」(田川市美術館／福岡) 崇城大学芸術学部美術学科洋画コース非常勤講師を務める(～2014) 「僕たちの広場展#2」(宮崎県立美術館県民ギャラリー1)	
2013	● 個展「絵画のじつぽ」(アートスペース色空／宮崎) 三人展「柳瀬祥一・園田博一・島養清史」(アートスペース色空／宮崎) 「第30回む展」(鹿児島市立美術館) 「僕たちの広場展#3」(宮崎県立美術館県民ギャラリー1・2)	
2014	● 個展「ちゃんぽん展」(et.YU 鯛の子ギャラリー／宮崎) 個展「絵画の肖像」(アートスペース色空／宮崎) 「僕たちの広場展#4」(みやまきアートセンター・アートスペース色空／宮崎)	
2015	● 個展「日々の素描」(五ヶ瀬町自然の恵み資料館／宮崎) 「アートのふる街」(若草通り商店街／宮崎)(～2016) 「それぞれのスカラベ展／藤林毅三へのオマージュ」(あかね画廊／東京) 「僕たちの広場展#5」(宮崎県立美術館県民ギャラリー1・2)	
2016	● 「第20回記念県美術海外留学賞歴代受賞者展」(宮崎太陽銀行本店2階ギャラリー／宮崎) 「第2回九州選抜美術家展」(五ヶ瀬自然の恵み資料館／宮崎) 「紀の国トイナート『あんちゃん＆きよひめ』」(道成寺駅／和歌山)	

	2017 ● 「宮本三郎記念デッサン大賞展」 皆川明實 (小松市立宮本三郎美術館／石川・世田谷美術館分館／東京) 「鬼丸〜鬼塚良昭の人の仲間展〜」(国富町総合文化会館／宮崎) 二人展「individualize 宮城壮一郎 × 島崎清史」(GALLERY INDIVIDUAL／宮崎) 「MESSAGE2017 南九州の現代作家たち」(都城市立美術館・その他サテライト会場／宮崎)  宮本三郎記念デッサン大賞展 皆川明實 受賞作品「カノン」 2017年 2019 ● 個展「風景画」(アーツスペース色空／宮崎) 「サントワラーフエスタ2019〜砂の造形と花のミニボレーション〜」 (サントワラーフエスタ／宮崎) 「宮崎県美術海外留学賞歴代受賞者作品展」(宮崎県立美術館)
--	--

関連イベント概要

11. 21 (日) 14:00～15:00

トークイベント 島寄清史×妻木良三

会場：高鍋町美術館多目的ホール

聞き手：青井美保（当館学芸員）

武蔵野美術大学時代の後輩にあたる妻木良三をゲストに迎え、在学中から現在に至るまでの島寄作品の作風の変遷、影響を受けた作家などについて、対談形式で講演した。

※口述内容は p.37 に記載



11. 27 (土) 14:00～15:00

当館学芸員によるギャラリートーク

会場：高鍋町美術館企画展示室

当館学芸員・青井美保が、企画展示室内に展示されている主要作品について、本展展示作品以前のシリーズや島寄が影響を受けた作家などに触れながら、解説した。



トークイベント口述

青井：最初にお二人の出会いについて、お聞きできればと思いますけども。

島寄：妻木君とは、僕が大学3年生の時、すいどーばた美術学院という美術の予備校で講師をしている時に、僕のクラスにいたのが妻木君でした。鉛筆デッサンかなんかで手を描いたものがあつたんですけれども、そのデッサンが度肝を抜くような素晴らしいデッサンをして、誰だと思ったら、それが妻木君だったわけですね。僕が助手になって、彼は学生で入ってたのか。で、僕が大学の助手を辞める時に、彼はまだ大学の研究室の油絵科の助手になったということですね。だからずっと、なんかあの僕の後を。

青井：同じ流れになっていったということですね。じゃあ同じ武蔵野美術大学の中で、妻木さんが大学生で、その前からすいどーばたの時代で会って、同じ大学の中でも年齢差はあるけれども、一緒に様子を近くで見えていたという様な関係性ですね。

島寄：僕が東京11年いた、そのほぼ大学の時代を、彼は知っているという感じで。

青井：おそらく今日ほとんど宮崎の方に参加して頂いてるので、逆にその前の時代からの流れというのを、妻木さんと一緒に今日は見ていけるという様な感じですね。

妻木：はい。そうですね。印象に残っているのが、当時僕二浪したんですけど、当時の美大受験の頃はやっぱり東京藝大にね、行きたい行きたいということで、そういう時に島寄さんが卒業制作で、ムサビの賞というか、作家である先生達にすごい評価されて・・・

青井：大学の卒業制作ですね。

妻木：当時そういうのに選ばれて、東京藝大目指すのもいいけど、他の美大行って、こういう流れもあるよということを・・・

青井：なるほど、ちょっとお手本的な。

妻木：なので、僕もまあ、似たような流れですけど、良かったなど。

青井：ではここから、島寄さんと妻木さんそれぞれ、これまでどういった作品を手掛けてこられたというのを、かなりたくさん画像をご用意頂いておりますので。島寄さんの、東京時代の作品を見ていきたいと思います。東京時代2000年までの流れですね。

島寄：卒業制作の作品。学校の倉庫に戸棚があって、何を描こうかっていって探しにそこに行つたんですけども、棚ごと、あるいは部屋ごと描きたくなくて、描いてみたくなくて描いた作品。それが卒業制作の「棚」という作品ですね。

島寄：これが大学院の「部屋」というタイトルです。これは助手時代の作品で、「鬼を待つ」というタイトルで、小さい頃、子供の頃にかくれんぼをした記憶というか、そういったものを描いて、股覗きみたいな、探してる仕草ですね。それで、隠れて待ってる様な人が下にいたりしますけども。これはかくれんぼでありつつ、絵の中に体を入れて、そして体でキャンバスのスケールを測っている。例えば手がフレームにかかっていることだとか、あと足の裏があります。それが絵画の空間というか、奥行きを作るんですけども、その一番手前の所ということで、そのキャンバスの中に入ってスケールを体で測っているという様な。

青井：今の作風にも共通する感じがしますね。

島寄：そうですね。これは戸谷成雄先生という彫刻の先生が、その時非常勤講師でおられて、この絵を良いって言うてくれたんですけども、実は戸谷先生と話してる話の中で、色々ヒントを頂いて、それで出来た作品なんです。で、戸谷先生が、宮崎県立美術館で・・・

トークイベント口述

青井：公開制作でみえたことがありますね。

島嵯：あの時に、お前の所にちょっと行きたいって言って、夜来られたことがあったんですけども、その時も「お前、あの絵を見せろ。」って言って。もう一回引き出して、「あーこれだこれだ。」って。その時に、「実は戸谷先生から色々影響を、刺激を受けて描いた作品でもあるんですよ。」ということ。そのタイミングで、伝えたんですけど。

妻木：これ描いてる時、アトリエに観に行ったんですよ。で、大量の缶コーヒーの、ゴミ袋に異常な量の・・・スペースにおかしい量の缶コーヒーの空き缶が積まれていて・・・なぜ捨てないんだろうって。

島嵯・青井：はははは（笑）。

妻木：それがすごい印象に・・・

青井：なるほど（笑）。すごい傍にいた人ならではの。

妻木：それほど絵の方に多分ね、入り込まれてた。

青井：そうですね。多分命を繋ぐものとして缶コーヒーがあったんでしょうね（笑）。

島嵯：そういう時でしたね（笑）。

青井：ちょっと飛んでますけども、宮崎に帰ってきて受賞・・・

島嵯：そうですね。中国に行った後に描いた、宮日会館で2003年だった、帰国報告展。で、この時中国に行って、言葉も喋れないまま行っただけで、どういう絵を描こうかなと色々考えていたんですけども、書店に行くと割とその、日本の昔話、絵本だとかそういうものが、もちろん中国語で書かれてるんですけども、「なんだ、日本と同じ話をみんな知ってるんだ。」と思って。それで、会話がなかなかできない分だけ、何か向こうの人たちと絵を介して、話ができるものとして、昔話というものがあったわけですね。で、それをモチーフに描きました。

青井：で、次のまとまりとして、ここに出てくるのが「タコ時々カタツムリ展」ですね。で、この時、立体の作品になってるんですね。

島嵯：そうですね。この時期は留学から帰ってきて、教室を始めた時期だったんですけども、それと、教室は開いたばかりで生徒も一、二人とか、そういう。始まりとしてそうでした。で、それと合わせて佐土原人形の絵付けのアルバイトをしながら、教室もやって、カルチャーも受け持っていたみたいな感じで。で、人形の絵付けをしたことが、これは紙粘土なんですけども。何かこう自分でも人形的なものを作ってみたい欲求が出てきたんだと思います。それでこういうものを作って、それをまたモチーフに絵を描いて、ということをやりましたね。とにかくこの時は軟体的なタコだとかカタツムリだとか、そういうこうぐにゃっと、なんか柔らかいものを。

青井：捉えどころのない様な。

島嵯：そうですね。そういうものをモチーフに好んで描いてましたね。150号、一面に描いて。で、そこからその後に左のカエルが出てきたわけですけども、これは、こっちではキャンバスに描いてるんですけども、その像の所だけ切り取った様なものです。だから、背景の白は壁の白で・・・

青井：あ、そうですね。立体的な・・・

トークイベント口述

島寄：そうですね。だからまあ絵の中からカエルだけが飛び出した。昔僕ら、アニメ世代では「ド根性ガエル」とかありましたけども、あれはカエルがTシャツにこうね、くつついて喋ったりしてますけど、そのまあ逆ですよ。要するに、シャツから飛び出したカエルみたいな。で、それをやった時に、これは絵と呼べるのかどうかってことを、作った時に思ったんですね。で、これがもし絵と呼べないのであれば、これを絵と言わしめてるものというのは、実は描いた実像じゃなくて、その背景にあるんじゃないか、ということを感じたわけです。

青井：背景があるかどうかで、絵かどうかを、人は判断してるんじゃないかということですね。

島寄：空間というか、ある・・前提としての空間というものが、その背景なのかなという気もして。

青井：あと、この時期から、「僕たちの広場展」という形で、宮崎市内で、宮崎の少し島寄さんより下の世代の人たちと一緒に、団体とかを超えて、グループで発表するという活動が始まった時期ですね。

島寄：はい、やりましたね。5年・・5回続けてやりましたね。カエルをうけて、またこういう作品が出てくるわけですけども、で、この辺りからもう抽象、今回の展覧会のタイトルになってますけども、抽象的な作品が増えていきます。

青井：3回目でフランケンシュタインの発表があった頃ですね。

島寄：絵っていうものが、例えばキャンバスって状態が最初にあって。で、そこに何か描かれると、それが描かれたことによって、ただの物質、物としてのキャンバスが絵画に変質するわけですね。で、どこでそれが変わるのか、いつから絵画という・・呼ばれるものに変わっていくのかっていうことを考え始めて。で、その境のところを色々やってみよう自分なりに洗い出してみようということで、さっきの「カラーピース」だとか、あるいはこの「フランケンシュタイン」もそうですけど、黒いシリーズもそうですよね。

青井：これが今回展示されてる前半と、比較的時期が重なっている感じですね。この後・・これは若草通を舞台にした、どちらかというとパフォーマンス的な「アートのふる街」という、街の中でアーティストたちが、その日一日限りのパフォーマンスを行うという様な取り組みの中で、島寄さんは2回参加されているということですね。ちょっと釣り、ん？釣り具みたいな物が。

島寄：はい、これは若草通ですね。若草通の所で釣りをしている絵ですね。この「祝」とかっていうのはその、周りの商店街の名前を一つずつ描いていって、描いては消して、描いては消してみたいなことをやりながら、時々釣りをしてっていう。パフォーマンスをやるっていうことは今までなかったんで、これを企画していた松下君とかに、半ば吹っ掛けられる様な感じで。それで、じゃあっていうことで、やってみたりとかですね。

青井：これは？

島寄：これは紙筒みたいな物を作って。で、その中に潜りながら、色を塗ったりして、で、最後自分が出て、その中に描いたやつがこう裏返しに・・めくってひっくり返した様な。

青井：じゃあ描いてる時は、中で何が描かれているのか誰にもわからない・・

トークイベント口述

島寄：もぞもぞした状態。周りの人もこれ何かな？っていう様な感じで。

青井：なるほど。そして「日々の素描展」で、娘さんですかね？モチーフ。

島寄：うん、そうですね。娘も生まれて、五ヶ瀬でこれは最初展示をしたんですけども。娘たちがモチーフなんで。宮本三郎デッサン大賞展か。

青井：はい、皆川明賞ですね。

島寄：はい。これはでも、青井さんに何か・・・

青井：皆川さんの関心のある表現を、たまたまテレビで観る機会があって、島寄さんが今描いてるものに、見た目というよりは、内容、表現的な部分で共通点を感じました。

島寄：ありがたい。

青井：すみません（笑）。はい。で、やっと和歌山県が出ましたね。はい、駅の中で島寄さんの作品が紹介されるという。

青井：この写真は、妻木さんに最近、撮りに行かれたものを使わせて頂きました。

妻木：僕が撮ったやつですね。1週間くらい前にちょっと観に行って。

青井：私ずっと和歌山での展示だったんで、妻木さん関係で和歌山に行かれたと思ってたら、全然違って、さっきの「アートのかふ街」の松下さんとかと一緒に、また別の和歌山のお知り合いの方のお声かけで、トリエンナートに参加された年だったという風に・・・

島寄：そうそう。和歌山の駅舎を色んな人たちが、作品でこう埋めたりとか、なんかパフォーマンスをしたりだとかっていう、J Rとタッグを組んで大規模なイベントなんですけども。で、その一つで道成寺っていう・・・僕が小学校の時音楽の時間で、あんちんきよ姫っていう歌を教わった記憶があって、その時に歌の中で「きよ姫」っていう所を、僕の名前が清史なんで・・・友達がからかって。名前を変えて、からかわれて歌ってた。

青井：思い出の歌なんですね。

島寄：まあだから良く覚えてるんですけど。そこの駅がある、正にそのお寺の、物語があるんですけど。悲恋の物語。で、その物語のことを描いてる絵ですね。これは番号が振ってあったりするんですけど。「あんちん」という修行僧ですね。で、それが最初約束を交わして・・・戻ってくると言っていたのに、だけど私は修行の身だからそういうわけにはいかないって、振り切って、それで逃げて行くんですけど。その後を追って入水したきよ姫が蛇に化けて、お寺の鐘の中に逃げ込んだあんちんを最後には焼き殺してしまうっていう様な話なんですけども。それをこういう形で描いて、徐々にこう最初は曲線的な感じの表現をしていたのが、だんだん直線的な・・・表現に変わっていくっていう。でも目だけはずっと変わらずにキラキラした目ですけども。

青井：モチーフとしても、まだ昔話を描くに近い描き方が。

島寄：うん、そのことがあったから描けたっていうね。

青井：そうですね。はい、で、仲良さそうなお二人が・・・

島寄：これは（笑）。出来て飾り終わった後に、妻木が来てくれて。それで話して。なかなか良い。これ奥さんがね、妻木くんの。

青井：あ、撮ってくれたんですね。

妻木：2016年かな。

トークイベント口述

青井：5年前ですね。この、この本堂で歌ってる妻木さん（笑）。

妻木：びっくりして、打ち合わせで。こんな写真、入れられてたもんですから。普段僕こんな感じでマイク持って歌ったり。

青井：あ、歌ってるんですねこれ（笑）。あ！ほんとだ右下にカラオケのモニターが。

妻木：鶴田浩二ですね。傷だらけの人生です。

青井：すごい、楽しそうなお寺ですねー。

島寄：ははは（笑）。

青井：はい、さらっといきます（笑）。で、「individual」というギャラリー。今もうなくなっちゃったんですけど、宮崎市内のギャラリーの二人展ですね。

島寄：この時、宮城君って言ってその、「individual」の・・・かぼちゃ、これも漆の作品なんですけれども。それと、バックにあるのが私の、二人展をした時の絵ですね。この時また昔話の絵が復活しました。

青井：そして、風景画に。

島寄：そうですね。風景画っていう切り替えで。

青井：ちょっとここ辺の作品を見て頂きますね。さっきの「アウトライン」とか「フランケン」の作品と風景画の、まあ正に今回の会場もそういう感じですが、だんだんこういったものが島寄さんの表現に占めていくというか。

島寄：今回の会場でも、半分は「geo」だとか点描でやった作品、それから「反転地」だとか「四方山話」とか。半分が向こうの方ですね。手前の方は黒い「フランケンシュタイン」だとか。おおざっぱに、本当に粗く絵を大別すると。瑛九なんかを見てると本当にそうだと思うんですけど、なんかフィギュアを描いたもの、要するに形を描いたものと、あと瑛九の場合だったら点描で描いた・・・「つばさ」とかね。「田園」とかありますけど、ああいう・・・空間を描いたもの。「風景」という風にいっても良いと思うんですけども。そういう「形を描いたもの」それから「空間を描いたもの」に大きく大別されるんじゃないかっていうことを、まあ前提として立てて。で、その「形を描く」というものを行ったのが、前半の「フランケンシュタイン」だとか「青の肖像」だとか、「イエローナイフ」。「イエローナイフ」から始まりましたけど、あの辺りの作品です。キャンバスの中に形を描くっていうよりは、キャンバス自体の形を描くっていうか。一種の肖像的なものを像として捉えて描く。だから中に何かを描いてしまうと二重の像になってしまうんで、そこを描かずに。

青井：あくまで絵画を肖像として。

島寄：はい。で、塗るという作業がそこで、だんだん出てくるわけですけども、塗りながらその肖像として捉えて描くっていうこと。で、点描の「geo」とかっていうのは、今度はそこは切り替えて風景描こうと。で、点と線っていう抽象的なものを用いて風景っていうものをどういう風に描けるかっていうことをやったものですね。

青井：妻木さんは、今日この「島寄清史展」は、宮崎も初めていらっしゃったということで。今日初めて見て頂きましたけども、2013年からの分を今回見て頂いてるので、ここ8年くらいの作品でしたが、ご覧頂いていかがだったでしょうか。

トークイベント口述

妻木：なんかその・・・島寄さん本人が、今こういうイメージで、こういうテーマで描いてるっていう、そこは僕、今回解説に書いてるの、あえて見ずに。まだ読んでなくて。

自分の感じで、って思って。僕がここに来るまで、おやっと思ってたのが、学生の頃とかに、最初の頃出てきた棚の絵とか窓の絵とかに出てくる色面というか、色の面がその中でいっぱい出てきたんですけど、あの・・・島寄さんの感覚っていうか、そこからくる筆致というか、色面と色面がぶつかるところにこう、ぶつかるきわというか、色の面があって必ずその縁に、何か起こってる感じがあって、それがこうなんていうのか、近作にもいっぱい出てきてる様な気がして。

青井：なるほど。共通するということですね。面白いですね。

妻木：さきほどの自分の股から自分を覗いてる青い絵とかも、背景の青と、ズボンの青がせめぎ合うところに出てるっていうか、そういう様な感覚的なところが、こう抽象に、こういう絵になっても出てきてて。

青井：おそらくだいぶ、要素としてはそぎ落とされてきていると思うんですけど、東京から宮崎に来て今に至るまでに。そぎ落としても、そぎ落としても、そういうその本人の、筆致というか。無意識にこだわっているというか。

妻木：黒い角材までも、なんかこう塗ってるこっちの面とこっちの面のぶつかるところに出てくる感じというか。あと、つい自分の普段見てるものと重ねて見てしまうんですけど。今日会場来るまでに、SNSとかで画像だけ見てると、このシリーズ（geo）、そのドットが全然見えてなくて。普段僕、ため池が好きでよく歩きに行くんですけど、その上のにってるあの絵の具のあれを山に見立てて、下の矩形の部分がため池の表面というか。ただドットが見えていなかったんで。ため池をいつも歩きに行くと、ため池って濁ってるんで底が見えないんで、曖昧なままその水面が絵画の様に、池の周りが絵画の縁で、池の水面がその・・・、その内、矩形の内側というか。で、近づいて行くと微妙にそこに魚が動いているのが見えたり、水面には、ちょっとそのなんか水草みたいなのが見えたり、その近づくと見えていく感じがあって。で、今日はこう会場に入って、ため池に接近して、その表面というか、ようやく絵画の色とか・・・が見えてきて。

青井：やっぱり生でないと、読み取れないものがありますよね。

妻木：そうですね。で、上のにってるあの物質っていうか、僕が山に見えてしまうあれも、あれ以上大きいと、そっちが強すぎて。

青井：目がいってしまう。

妻木：なんか絶妙な量でのもってるかなとか。そんな感じです。

青井：はい、ありがとうございます。

島寄：この写真は「ゴロタロ」の一番最初の写真です。

青井：あー！そうなんですね。すごい。

島寄：向かって右側の方が、今会場に置いてある「ゴロタロ」で、始めの頃ですね。左側は、展示はしてないですけど、家にある、こっちは油絵。これはアクリル絵の具なんですけど、左は油絵。何か月か、ちょっとずれてますけど、大体同じ様な感じ。



「ゴロタロ/画面体」（2018年）

島寄清史

トークイベント口述

青井：大きさもだいぶ違うんですか？

島嵯：油はちょっと遅いので、乾くのが。アクリルよりは小さめ。今もまだ並行してやりますけど。

青井：というところで、それでは次は妻木さんの作品を・・。フライヤーで、すごく小さくてすみませんでした。それをご覧になって、どんな絵を描いている人なんだろうという風に思ってる方も多いと思うので。一番古い作品、1998年の画像から持って来て頂きました。ありがとうございます。

妻木：島嵯さんとのトークということで、古いのを持って来たんですけど。

青井：ありがとうございます。

妻木：これ描く前は、まあ油絵・・油絵の具使って色々描いてて。で、まあどんな人でも、絵の、美術の方じゃない人でも自分のいる場所の枠というか、当たり前の様に、なんかこう・・してしまってることがあって、自分に合ってないのに。でも、この絵垣から、なんかその、絵の前までは、この白い布の上に例えばリンゴを置いてたりとか、静物画におけるその・・

青井：なるほど、よく使われるものですね。

妻木：うん、初めてなんかね自分に一番合った素材とか、その一自分が反応してるモチーフとかって何かなって考えた時に、もう油絵じゃなくて、鉛筆が心地良いやん、とか。その・・モチーフ・・僕の中でも、例えばリンゴを取っ払って、そして敷いてる布のひだに反応してるなあって思って、そこが始まりで、うん。で、これ100号サイズなんで・・160cm。で、だんだんその、描いているうちに自分のその、何て言うのかな。画面見ているとひだがどんどん、動いていくっていうか。

青井：すごいですね。もうなんか、自分の意思を持ち始めている様な。

妻木：そうそうそう。絵のモチーフというか、絵の中の・・そのじっと見ながら、こう動いているっていうか。

青井：うんうん。まあよりひだの方にこう、妻木さんが集中した時に起こりうる・・

妻木：そうですね。だから布じゃなくてもいいっていうか、別物にこう・・

青井：もはや布でもないとか。

妻木：そうですね。まあ皮膚感的な感じ、が強くなってきた。はい。

青井：なるほど。次いきます。2006年。

妻木：この辺は結構自然光の下にモチーフを置いて、光と影を、ちょっとこう劇的じゃないけど、綺麗やなと思うところに置いて。

青井：そのモチーフというのは何なんですか？

妻木：イメージだけでは描けないんで、まずそういう床の上に、白い布でまず山脈というか風景を形作って。んで、瓶とか、いくつか立てて、その上に布を被せて・・

青井：へえ～。なるほど。その突起の部分は瓶とかを置いて。それを被せることで突起にするっていうことですね。

妻木：で、その時のイメージに近い形に、まず風景を・・形作って、それを写生する様な感じで。

トークイベント口述

青井：なんか風景っていう意味では島寄さんと同じですし、布への執着みたいなものも、島寄さんも結構前半「カラーピース」の時に布の塊をそのままキャンバスにくっつけちゃったりとかをして、なんか共通、表現されているものも違いますけど、共通点を感じますね。はい、2008年。2年後ですね。

妻木：で、これは和歌山帰って来てすぐなんですけど。ひとつ前のとかはまだ東京にいる頃で。なんかその地上というか、ひだがこう隆起していくんですけど、内側にちょっとこう平坦な空間がないとなんか落ち着かないっていうか。その受け皿的っていうか、これはそういう時期ですね。

青井：なるほど。その中に窪みがあるっていうか・・・

妻木：そうですね。盆地状の周りが隆起でうねったり、波なんですけど。構図がこんな感じになって、で、次。で、これは和歌山に帰って来てから描いたやつで、自分が意識してるわけじゃないけど、海岸みたいになってきたり。

青井：そうですね。和歌山も海が近い場所ですよ。

妻木：そうですね、うち港町で。

青井：これ2013年。「きょうけい」と読みますか？

妻木：そうですね。あの、さっきの盆地状のもそうです、「境景」。境目っていう字に風景の景ってことで、さっきの島寄さんの色面のぶつかる話もそうだと思うんですけど、海と陸のぶつかるところに波が起こったり、海岸の地形が変形したりする



「境景 E-II」(2013年) 妻木良三

のとか、時代と時代が衝突するところに、戦争は嫌ですが、なんていうのかな・・・色々波が起こる。ある世界とある世界をぶつかる境目に現れる隆起というか、風景っていうのでつけました。で、これ2014年なんですけど、一番最初に見せた平坦な、まだ布ってわかる、一回ちょっとそういうところに帰っていくものがあって。

青井：あー、それで「始景」っていう名前なんですね。

妻木：たまたまですけど東北の震災の後で、自分の中でそれまでさっきの隆起も、津波じゃないですけど、この絵のタイトルが、「始まり」の景色として「始景」って名付けて。穏やかな・・・これ、まあなんていうかそういう・・・

青井：そうですね、なんかいままでの作品よりも、そのものの外側がないっていうか、これだけで一つの景色として成立してる感じが、今までの感じと違うので、多分その海とか、いわゆる私たちが普段見ているものとの、近いものを見ていると感じる人も多いのかなあという感じがしましたね。あ、これは実際の風景の中に、作品を並べた時。2020年なんで昨年ですね。

妻木：去年ですね。の、6月に。前から、いいなあと思ってた海岸があって。で、いい感じの洞窟、穴がいっぱいあって、その中に絵を並べたいなあってずっと思ってた。で、たまたまずっとコロナ禍のこともあって、あまり展覧会とかできない雰囲気の中で、まあこれやったら外やし・・・

トークイベント口述

青井：あ、じゃあこれ妻木さんご自身で発案というか。なんか全体の何かアートプロジェクトの一環でとかではなくて、作品発表の一つとして。

妻木：そうそうそう。で、二日間だけ。

青井：へえ～！すごいですね。

島寄：その「やるよー」って言って、SNSかなんかに上げて。

妻木：SNSだけで。

青井：へえ～すごい（笑）。実行力。

妻木：それでもし、天気が悪かったりしたらダメなんで、来てくれる人は必ずやり取りして。

青井：完全予約制的な感じですね。なんか海が、ここまで水が来るんですしたっけ？

妻木：あのね、潮の満ち引きもね、ちゃんと調べて。ほんで夕方になってきたら最後満ちてきて、陸ってというか道に戻るまで、濡れながら戻る様な状態で。

青井：すごいですね。

妻木：で、この並べられている絵が、全部この海岸を描いた絵なんですけど。この海岸の洞窟の穴の中に、この海岸を描いた絵を置いてみたいなと思って。で、この絵の中にも穴があるから、その絵の中を・・・

青井：すごい、鏡みたいな感じですね（笑）。向こう側にもう一つ穴があるみたいな。

妻木：ロシアのマトリョシカみたいな感じ、になったらいいなと思って。

青井：おもしろいですね。

妻木：だから島寄さんの「反転地」かな、ああいうの見た時に、まだ解説読んでないけどすごい、そういうの感じて。

青井：いやいやいや、すごい不思議なんですよね。それをわかって島寄さんが呼ばれたのかは、私もわからないんですけど、あまりにその描き方とかは全然違うんですけど共通点が。

妻木：だから「反転地」っていうのも、海岸や貝殻のうず。まあ自然の造形物、そういうことはいっぱい。じっと見てると自分の体の大きさが、こうわからなくなるっていうか・・・なんかこうそれが楽しくって。で、このほら穴に並べてみよう。

青井：次元的なものまで風景の中に描いているというか。そういう作品ですね。

妻木：これ現在進行中の作品ですね。もう数年前に一回展覧会出したんですけど、まだやっぱり加筆、今してて。寝かせてた時間も長いんですけど、今ちょっと描いてる。

青井：ちょっと、アップの画像もあるので。細部がこんな感じですね。なんか、さっき島寄さんが軟体に惹かれるって話が出ましたが、そこも共通する様な、なんとも言えない物質感ですね。

島寄：彼の絵をずっと見てきて、あの・・・怪しいですよ。この「怪しさ」ってどっからくるのかなっていう感じが、いつも見る度にしているんですけど、まあこれを例えば「ひだ」っていう風に捉えるとすると、「ひだ」というのは要するに、表・・・表面に出ていたものが、こう、ある部分隠れるっていうか、凹んで見えなくなる。で、その要するに、見える部分とその見えなくなる部分とをはらんでいる形だと思うんですけど。で、その見えないその・・・これはまあ戸谷さん流に言うと、見えない闇を彫刻は抱えているっていうことを言われるんだけど、その見えない部分をはらんでいるっていうことが、彼のその「怪しさ」だとか・・・って

トークイベント口述

いうことに繋がってくる様な感じがしますね。そこが非常にこう、魅力的にも感じるんですけど。

青井：そうですね。妻木さんの作品はこれで最後になりまして。驚きの、あと5分で終わりという感じなんですけど（笑）。

島寄：まあばっと見て頂いて。

青井：で、あとその今後のこととかも少しはお聞きしたい。ここからは島寄さんのこれまで影響を受けた作家についてです。

島寄：宇佐美圭司ですね。もう宇佐美先生からは多大な影響を受けている。これは東大の食堂に飾ってあっていつの間にかこう・・・捨てられたっていう。

青井：ああ、問題の。今回チラシで宇佐美さんの名前を初めて知った人が、インターネットで調べたら最初に出たのがそれだったっていう、っておっしゃってました。話題の・・・残念な出来事ですね。

島寄：・・・遺作も。非常に素晴らしいですね。本も書かれて、「20世紀美術」。これを読んで、また色々考えて僕も今やっているところです。

青井：島寄さんが今回展覧会にも言葉を寄せて、この作品はどういう背景でっていうのを、会場でも置かれているんですけども、そういう風にテキストを添えるっていう形っていうのは、宮崎ではあんまりいらっしゃらなくて。ま、宇佐美さんとか、岡崎乾二郎さんとか、戸谷さんもですね。そこ辺の方の影響が大きいのかなっていう話をさっき妻木さんともしたところでした。岡崎乾二郎さんですね。

島寄：岡崎さんも、今も大注目の作家ですけども。

青井：そうですね。岡崎さんも宇佐美さんの教え子・・・？

島寄：そう。Bゼミで教わったんじゃないかな。で、まあ色々なことが宇佐美先生から伝わったものがあって、それをまた岡崎さんなりに更に展開されてという。宇佐美先生がされているように岡崎さんも本を書かれていますし。

青井：最近の作品ですね。こないだ豊田市美術館でも展覧会がありましたね。

島寄：「ポンチ絵」。すごく、注目今している作家で、まあとても足元にも及ばないんですけど、なんか色々またヒントを頂きました。

青井：あとは、ここからは・・・

島寄：これね、熊谷守一。まあ岡崎さんも熊谷守一を非常にこう研究されて、本にも表しているんですけど、その東京都近美でやった熊谷守一展の中の絵なんかは、「反転地」の構図と・・・

青井：言って大丈夫なんですか（笑）。

島寄：あの、これ見て描いたわけじゃなくて、たまたま・・・見つけたっていう。

青井：同じこと考えてたんだっていう感じでしょうか。これも熊谷守一ですね。

島寄：素晴らしい作家で。はい。

青井：山口長男さんです。宮崎県美にも所蔵されています。山口薫。宮崎県美にも所蔵されています。岡田謙三さん。

島寄：岡田謙三さん。この人はもう素晴らしい作家で。

青井：巖光さん。あ、ポイントですね。

トークイベント口述

島寄：黖光。これあのちょっとその、テキストの中にも触れてますが、この画面左上にあるちょっと黒い葉っぱみたいなのが描かれてるんですが、これは長く・・あの残ってて、「イエローナイフ」のところにもぐっと刺さってきたっていうか。始まりとしてはそういう様な。

青井：いや、私言われるまで気付かなかったんですけど。今回のあのテキストで初めて「イエローナイフ」がここからきているという。

島寄：非常に緊張感のみなぎった絵だと思うんですけども、空いた部分を、研ぎ澄ましたものが・・・

青井：なんかこのポイントがあるかないかで、全く違う絵になるっていうのは間違いないですね。

島寄：うん、だからすごい引かかってた。

青井：そうですね。あ、日岡兼三さんですね。

島寄：日岡さんもお会いして話す機会がなかったにはなかったんですけども、この箱の底かなんかをモチーフにされて。で、その向こうに、真ん中にちょっと覗いた暗がりがありますけども、それが、そのまた向こうに世界があるっていうことを一つ示していて、それ僕の「反転地」のその真ん中にあるところ、黄色や黒ですけども、それと全く同じ発想・・これもまあ偶然の一致なんですけど。その一元的な世界のもう一つ・・



「空間から時間へ」（1997年）日岡兼三

高鍋町美術館所蔵

青井：向こう側ですね。妻木さんとさっきお話したこととも共通する。ちなみにこちらはあの、高鍋町美術館も所蔵

になっておりまして、今回、常設展示室に展示しておりますので、ぜひ島寄展ご覧になった後にぜひ、生の作品を。紙でできている繊細な。あっ、時間です。名前だけでも言っていきますか。道北昭介さんですね。

島寄：柳瀬さん。

青井：柳瀬祥一さん。坂本善三さん。瑛九ですね。この辺は宮崎の作家です。あと李禹煥さん。皆さんご存じだと思います。

島寄：今回、お手紙を書きましたけど。

青井：展覧会のご案内を。えっと宇佐美さんと李さんが対談してることとかですね。あと海外では、セザンヌ、マチス、ボナール。クレーなんかはすごく、多分あの、好きな方は島寄さんの作品見た時に、クレーが頭によぎる方もいらっしまったと思うけど。モンドリアン、フォンタナ、カラヴァッジョ、・・

島寄：カラヴァッジョは、最初見た時すごく、なんかちょっとえぐられる様な、痛みを感じる様なね。で、まあこれキリストのその切り傷を覗いているっていう場面らしいんですけど、フォンタナもカッターでシュッと切って向こう側、キャンパスのその向こう側が暗示されてるわけですけども、これと同じ様に見えるんですね。で、あのキリストっていう、その所謂・・なんていうのかな、実体がありそうでない様な存在に対して、その向こう側に何かあるんじゃないかっていうことを、フォンタナの絵も、カラヴァッジョの絵も示している様で。雪舟

トークイベント口述

なんかも、「秋冬山水画」の「冬の図」。それが分割されて見えるんですが、それぞれの違った様相を表していて、これがまあ「反転地」のヒントになっております。あの、分割された面ごとに違った局面があり、それが一つの風景を成している。

青井：まあ決して同じ視点からの風景ではないということですね。一つの画面の中に描かれているけれども。

島寄：そうですね。これはもう明らかに再構成されている絵だと思います。

妻木：この絵いつも不思議なんです。奥の岩のこう切り立っている・・・その上を見ると、右側が手前にきてるのか、僕いつも左の落款が押されてる側が、ま、落款押されてる背景が向こう側なんでしょうけど、なんか前後がどちらにもとれる。

青井：ちょっとある意味エッシャーみたいな感じですよ（笑）。どっちが上かわかんなくなっちゃうみたいな。

島寄：なんかこう次元がね。違うっていうか。

青井：そこに惹かれたんですね、島寄さんはまさしく。

島寄：そうですね。あの一何かその・・・うーん、なんていうのかな、風景の描写であるにも関わらず、どこかに連れて行ってしまわれる様な。

青井：ただ目の前の風景を見ているわけではないというか。というところで、お時間となりましたので、せっくなので最後に一言ずつお二人から頂戴したいと思います。

島寄：僕はまあ今たくさん影響を受けた、刺激を受けた作家を見てもらいましたが、一人でも、なんていうのかな、多く、素晴らしい作家が過去にね、歴史を紐解くとたくさんいるので、あの・・・尊敬してるんです。で、絵を描く時にそういうことっていうのは、すごく必要な気がするんです。あの、どうしても自分一人で、自分の中から引きずり出そうとしても、出てくるものっていうのは、そんなにね、ないので。だから、振り返ってみればこういう・・・たくさんのヒントが彼らの中に眠っていて。で、そこから力をもらうってことをしないっていうのは・・・もうそれは大損だと。なので、尊敬する作家を持つっていうことと、あとは絵画がやっぱりあの、なんていうのかな、色んなメディアが出てきて、僕が大学始めた頃は、絵画は死んだとか、そんなことも言われていましたが、僕はもう絵画の後継をしたいと。これからもその、絵画を受け継いでいきたい、という気持ちでやっていこうと思っています。

青井：ありがとうございます。妻木さん、最後に何か。

妻木：今回話の対談で・・・テーマは似てるところがあるかもしれませんが、島寄さんと真逆っていうか。人そのものもそうだし柔軟な、というか、温厚な感じもあって。で僕はそうじゃない感じが自分でわかって。今回話をするね、もう2、3週間前、なんかジャッキーチェンの「酔拳」とか、格闘技でいうと柔術とか、まあ「北斗の拳」好きだったんですけど、「雲のジュウザ」っていうのがいて・・・説明すると、まあすごい軽やかな。さっきの展開も、そういうその普段のこの・・・佇まいというか。

青井：こんなに真面目に考えておられるのに飄々としてる感じとかですね。

妻木：それを思ったのと、あとはあれかな。さっき、3人で話した時も絵を見ることに限らずですけど、ハナから難しい、わからんってはねのけるんじゃないくて、わからんくても、わかろうと耳を傾ける。じーっと作品を観るというか、そこに大きな違いがあると思って、同

トークイベント口述

じわからないでも。僕今でもまだ島寄さんの絵、言葉にできていないんで。このまま和歌山に帰ろうと思うんですけど。でもなんか、どういう感じで現れているのかをわかろうという。

青井：耳を澄ますというか。

妻木：それはどんなことにでも大事なかな。

青井：これから鑑賞するにあたって大切なこととお話できたと思います。ありがとうございます。それでは、これにて講演会を終了したいと思います。これからお二人が退場されますので、皆さん拍手でお送りください。島寄清史さん、妻木良三さんありがとうございました。

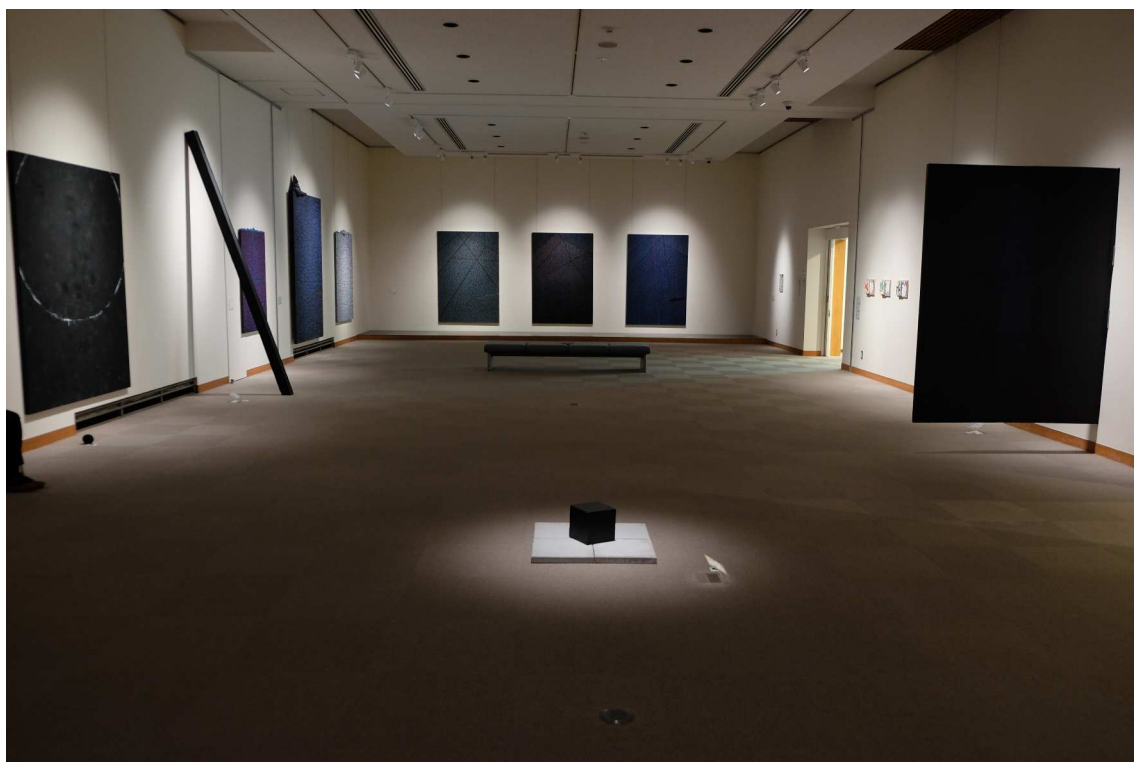
妻木良三

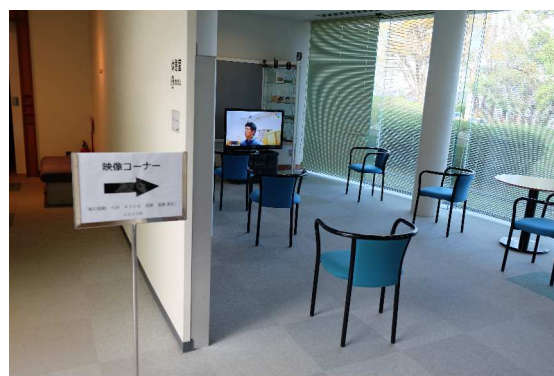
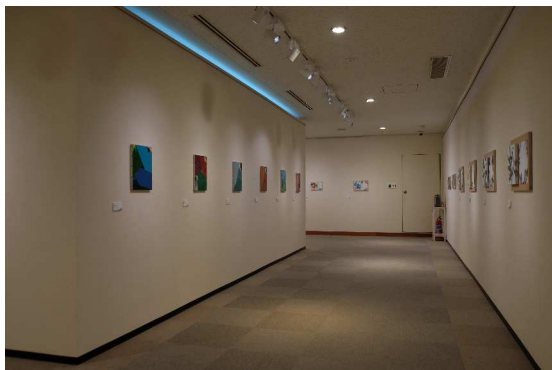
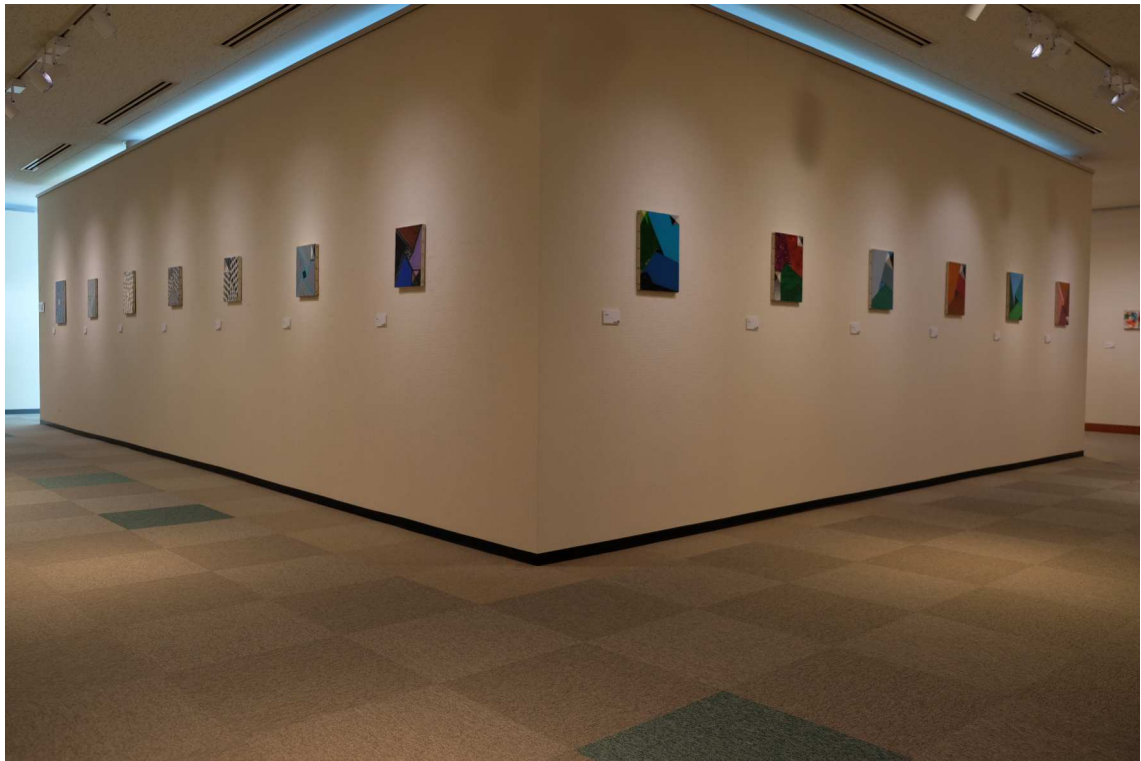
1974年和歌山県生まれ。浄土真宗本願寺派僧侶。2001年武蔵野美術大学大学院油絵コース修了。個展2011年「ZONE」Onomachiα（和歌山）、2017年「渚にて」KUGURU（山形）ほか。2016年、平成28年度和歌山県文化奨励賞。グループ展2006年「VOCA展2006」上野の森美術館（東京）ほか。

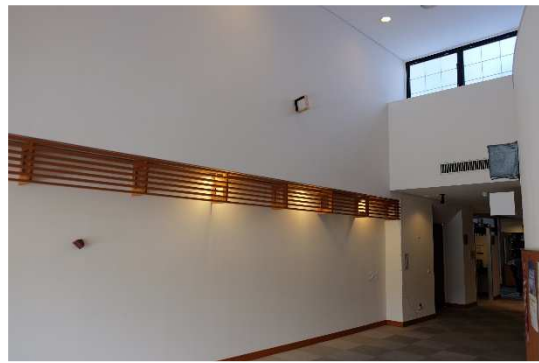


展示風景









島寄清史

風景の抽象画 | 抽象画の風景

2021.10.30^(土) - 11.28^(日)

主催 | 高鍋町美術館・高鍋町教育委員会・高鍋町 助成 | 芸術文化振興基金

後援 | 宮崎日日新聞社・MRT宮崎放送・UMKテレビ宮崎・エフエム宮崎

高鍋町美術館
TAKANABE MUSEUM OF ART



※ 作品番号は順路順の通し番号です

1. **ゴロタロ／画面体** アクリル 17×17×17cm 2018年～現在（未完）
1日1面のペースで6面を代わる代わる黒い絵の具で塗り重ねました。現在も進行中。
2. **イエローナイフ** キャンバス・油彩 194×130cm 2013年
ペインティングナイフで黄色い絵の具を塗り込みました。
3. **青の肖像** キャンバス・アクリル 162×390cm 2013年
キャンバスの裏側にある木枠をうっすら表に描きました。キャンバスそのものがモチーフの作品です。
4. **around** キャンバス・アクリル 162×162cm×2点 2014年
キャンバスの木枠を触りながら描いた作品です。
5. **mark** 木材・キャンバス・アクリル・スポンジ 194×162cm 2015年
スポンジに絵の具を染み込ませ、それをキャンバスに向かって投げながら描きました。
白い輪は私が手を広げた軌跡です。玉が輪を通過した痕跡を残しました。
6. **アウトライン** 木材・綿布・アクリル 300×9×100cm 2014年
支持体を角材に変えて、壁に立て掛けて設置しました。
7. **geo** キャンバス・アクリル 130×97cm 2018年
はじめに、点と線で風景画を描くことを決めました。次にその風景は身の周りの風景、宮崎平野になってきました。
8. **geo** キャンバス・油彩・セメント 227×162cm 2019年
キャンバス上部の山を明確にしました。
9. **geo** キャンバス・アクリル・セメント 162×130cm 2018年
キャンバス上側部に山があり、画面が山下に広がる平野や地中の様相を呈しています。
10. **geo／黎明** キャンバス・油彩・アクリル 194×130cm×3点 2020年
紙を谷折りした軌跡で山の残像を画中に取り込みました。
画面右下のナイフの形は、いつ襲って来るともわからない災害の予感をイエローナイフに倣って表しています。
11. **反転地** キャンバス・油彩・アクリル 33×24cm 2021年
風景が特定の場所から様々な局面を表す場に変わってきました。色彩や動き、光と闇が入れ替わり現れる場として。
12. **四方山話／もぞらし** キャンバス・アクリル 18×14cm×2点 2021年
13. **四方山話／さるく** キャンバス・アクリル 18×14cm×2点 2021年
14. **四方山話／よんべ** キャンバス・アクリル 18×14cm×2点 2021年
15. **反転地／反時計回り** キャンバス・油彩・アクリル 145×112cm 2021年
風景が動く仕組みを絵にしました。
16. **フランケンシュタイン** パネル・綿布・アクリル 200×150cm 2013年
キャンバスを壁に付き立てるように設置しました。
出来上がった時、得体の知れないものを作ってしまったようで、フランケンシュタインと名付けました。

作品リスト

17. 映像 「美の鼓動 九州 #208 画家 島崎清史」 2分30秒 2019年

18. 反転地 キャンバス・油彩・アクリル 103×73cm 2021年

19. 反転地 キャンバス・油彩・アクリル 103×73cm 2021年

山水画の折り重なる空間構成の方法を取り入れたことで、このような風景画ができてきました。
雪舟やセザンヌを身近に感じるようになりました。

◆反転地

「反転」という言葉は宇佐美圭司先生から伝えられた言葉です。

20. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	41×31.8cm	2020年
21. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	33.3×24.3cm	2020年
22. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	33.3×24.3cm	2020年
23. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	22.7×16cm	2020年
24. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	22.7×16cm	2020年
25. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	22.7×16cm	2020年
26. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	22.7×16cm	2020年
27. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	33.3×24.3cm	2020年
28. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	33.3×24.3cm	2020年
29. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	33.3×24.3cm	2020年
30. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	33.3×24.3cm	2020年
31. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	33.3×24.3cm	2020年
32. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	33.3×24.3cm	2020年
33. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	22.7×16cm	2020年
34. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	22.7×16cm	2020年
35. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	22.7×16cm	2020年
36. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	22.7×16cm	2020年
37. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	27.5×22cm	2020年
38. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	27.5×22cm	2020年
39. 反転地	キャンバス・油彩・アクリル	27.5×22cm	2020年

◆四方山話（よもやまばなし）

画面の四角（よすみ）を折り畳みながら描きました。言葉をモチーフによしなしごとを描いています。

40. 四方山話	キャンバス・アクリル	22.5×16cm×2点	2021年
41. 四方山話	キャンバス・アクリル	22.5×16cm×2点	2021年
42. 四方山話	キャンバス・アクリル	22.5×16cm×2点	2021年
43. 四方山話	キャンバス・アクリル	27×22cm×2点	2021年
44. 四方山話／はっちた	キャンバス・アクリル	18×14cm×2点	2021年
45. 四方山話／せからし	キャンバス・アクリル	22.5×16cm×2点	2021年
46. 四方山話／おっけねえ	キャンバス・アクリル	22.5×16cm×2点	2021年
47. 四方山話／てんころぼし	キャンバス・アクリル	22.5×16cm×2点	2021年
48. 四方山話／ひもじどが	キャンバス・アクリル	27×22cm×2点	2021年
49. 四方山話／ひもじかる	キャンバス・アクリル	27×22cm×2点	2021年
50. 四方山話／よしなしごと	キャンバス・アクリル	27×22cm×2点	2021年
51. 四方山話／つれづれぐさ	キャンバス・アクリル	27×22cm×2点	2021年

◆object

52. geo	木材・石・油彩	21×11×4cm	2017年
53. 反転地	木材・アクリル	3×2×1cm	2017年
54. 島	木材・綿布・アクリル	20×20×6cm	2017年
55. geo	木材・麻布・アクリル	10×7×5cm	2017年
56. 反転地	木材・綿・アクリル	10×8×1cm	2017年
57. ルージュ	木材・綿布・口紅	31×17×14cm	2017年
58. フランケン	木材・布・アクリル	40×10×23cm	2017年

島寄清史 風景の抽象画 | 抽象画の風景

会 期 令和3年10月30日（土）～11月28日（日）

開館時間 午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休 館 日 毎週月曜日（祝日の場合は開館）祝日の翌日（土日の場合は開館）

観覧料

大人300円（240円）

小中高生・高齢者・障がい者150円（120円）

※（ ）内は20名以上の団体料金。高齢者は70歳以上。障がい者は障がい者手帳所持者とその介護者1名まで。未就学児と高鍋町内の小中高生および特別支援学校生は無料。

会 場 高鍋町美術館

主 催 高鍋町美術館・高鍋町教育委員会・高鍋町

助 成 芸術文化振興基金

後 援 宮崎日日新聞社・MR T宮崎放送・UMKテレビ宮崎・エフエム宮崎

作品数 58点

職員（令和3年度）

館 長 萱嶋 稔

副館長 内田 美香

総務学芸係

係 長 中尾 英子

学芸員 青井 美保

事務員 久家 多佳恵

写真提供

島寄 清史 (cat.no.30-35,43)

妻木 良三 (cat.no.44,49)

高鍋町美術館 (cat.no.47)

令和4年2月印刷

令和4年2月発行

発行者 高鍋町美術館

宮崎県児湯郡高鍋町大字南高鍋6916番地1

TEL 0983 (23) 8887

印刷者 高鍋町美術館

宮崎県児湯郡高鍋町大字南高鍋6916番地1

TEL 0983 (23) 8887

Printed in Japan ©高鍋町美術館 2022 ©2022, Takanabe Museum Of Art
